

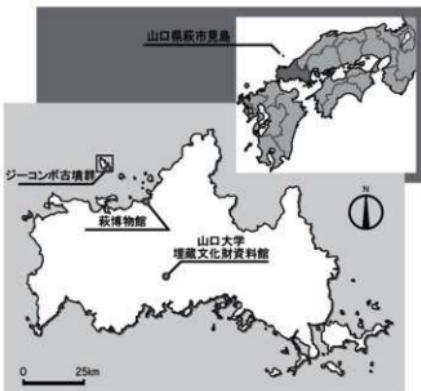
見島ジーコンボ古墳群  
第 154 号墳出土資料調査報告

2011

山口大学埋蔵文化財資料館

# 見島ジーコンボ古墳群

## 第154号墳出土資料調査報告



2011

山口大学埋蔵文化財資料館

## 序

山口大学が所在する県内五つの地区（山口市：吉田地区・白石地区、宇部市：小串地区・常盤地区、光市：光地区）は、いずれも遺跡の上に立地しています。そこで埋蔵文化財資料館は、本学の施設拡充等工事により遺跡が破壊される可能性が生じた場合、文化財保護のための発掘調査を実施しています。加えて、その調査・研究成果を報告書の刊行、実物資料展示など様々な方法により広く地域社会に公開することを重要な責務と考えています。

さて、当館には構内遺跡出土資料の他にも、山口県の著名遺跡出土資料が数多く収蔵されています。これは当館設立以前に本学教員により調査され、本学各所に収蔵されていたものを継承した資料群です。これらの資料に対し、当館は展示等で活用を図って参りましたが、一方で資料の由来等不明確な部分が多いこともあり、本格的な調査研究に困難を来たしてきました。貴重資料を収蔵する大学博物館施設として、その責が果たせない状況が続いたことをお詫び申し上げると同時に、本書を契機として収蔵資料の継続的な調査研究を力強く推し進めて参りたいと思っております。

本書は、国指定史跡『見島ジーコンボ古墳群』出土遺物の調査報告です。それは当館が収蔵する県内遺跡資料の中でも特に重要と位置づけているものです。約200基の存在が推定される墳墓中の1基に限定した報告となりますが、本書が考古学・歴史学・地域史研究等の基礎資料として活用いただければ幸せです。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げます。今後とも引き続き変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月  
山口大学埋蔵文化財資料館長  
額顕 厚

## 例言

1. 本書は、昭和35年(1960)から昭和37年(1961)の3ヶ年にわたり、山口県教育委員会および萩市教育委員会の合同により実施された、萩市見島に所在する「ジーコンボ古墳群」発掘調査成果の再整理調査報告である。
2. 上記の調査で出土した資料は、萩博物館（山口県萩市堀内355番地所在）と山口大学埋蔵文化財資料館（山口県山口市吉田1677-1所在）に分有保管されている。今回調査の対象とした第154号墳出土品に関しては、土器類は萩博物館に、金属器類は両館に、玉類は山口大学埋蔵文化財資料館に収蔵されている。
3. 出土資料の確認および整理作業は、横山成己（山口大学大学情報機構埋蔵文化財資料館助教）、松浦暢昌（山口大学事務局情報環境部総務係務補佐員）、乃美友香（山口大学事務局情報環境部総務係務補佐員）が担当した。
4. 出土資料に関しては、実測を横山・松浦・大熊玲奈（山口大学人文学部人文社会学科3年生）・河野和弘（山口大学人文学部人文社会学科3年生）が、写真撮影は横山・製図・整図は横山・松浦・乃美が行った。
5. 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の鉄器類については、山口大学所蔵学術資産継承権等委員会による予算配分を受け、（株）吉田生物研究所に委託し保存処理を行った。
6. 山口大学所蔵鉄器類のX線撮影撮影は（株）吉田生物研究所に委託した。撮影フィルムの画像データ化に関しては、山口大学医学部附属病院放射線部の岩永秀幸副技師長にご協力いただいた。
7. 本書の執筆は横山が行った。
8. 本書の編集は松浦の補佐を得て横山が行った。
9. 本書を作成するにあたり、下記の方々及び機関に協力・助言を得ました。記して感謝の意を表します。

石井 龍彦 大林 達夫 柏本 秋生 古賀 信辛 清水 満幸 西川 雄大  
乗安 和二三 村山 審一  
萩博物館 （財）山口県埋蔵文化財センター 山口大学事務局情報環境部

## 凡例

1. 本報告書におけるジーコンボ古墳群の造構番号は、『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会 1964)で付されたものに準拠している。
2. 出土資料については、今回の調査で確認できた全点に対して通し番号を付した。萩博物館、山口大学埋蔵文化財資料館における所蔵の別は、遺物番号の頭にそれぞれ大文字の「H」「Y」を付して表記している。別に、鉄器類には小文字の「i」を、玉類には小文字の「b」を付して識別している。
3. 遺物図の縮尺については、以下のように統一した。  
土器…1/2 鉄器…1/2 玉類…1/2
4. 遺物の実測図は、下記のように分類した。  
断面黒塗り……須恵器・鉄器  
断面白抜き……土師器
5. 土器の色調記号は、主として農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

## 本文目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
1 遺跡の分布状況	1
2 見島ジーコンボ古墳群造営以前の見島	2
第Ⅱ章 既往調査の概略	
第1節 戦前の調査・報告	4
第2節 戦後の調査	5
第Ⅲ章 第154号墳の調査	
第1節 昭和36年の現地調査	14
第2節 第154号墳の出土資料	18
1 土器	19
2 鉄器	30
3 玉類	38
第Ⅳ章 第154号墳の考察	
第1節 考察の前提	48
第2節 土器による考察	49
第3節 鉄器による考察	52
第4節 見島ジーコンボ古墳群及び第154号墳の特性	53

## 挿図目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
図1 萩市見島追跡分布図	3
第Ⅱ章 既往調査の概要	
図2 見島ジーコンボ古墳群分布図	11・12
第三章 第154号墳の調査	
図3 第154号墳石室実測図	15
図4 床面出土上器実測図	21
図5 撥乱層・表土出土土器実測図①	24
図6 撥乱層・表土出土土器実測図②	25
図7 萩博物館所蔵鉄器実測図①	32
図8 萩博物館所蔵鉄器実測図②	33
図9 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器・玉類 実測図	39
第四章 第154号墳の考察	
図10 見島ジーコンボ古墳群出土上器	50
図11 見島ジーコンボ古墳群出土鉄器	51

## 写真目次

第三章 第154号墳の調査	
写真1 見島総合学術調査当時の見島ジーコンボ古墳群遠景	
.....	16
写真2 現在の見島ジーコンボ古墳群遠景	16
写真3 見島総合学術調査における見島ジーコンボ 古墳群調査風景	16
写真4 発掘調査当時の第154号墳	17
写真5 視地保存されている第154号墳	17
写真6 史跡公園となっている見島ジーコンボ古墳 群西地区の現況	17
写真7 床面出土土器①	22
写真8 床面出土土器②	23
写真9 撥乱層・表土出土土器①	26
写真10 撥乱層・表土出土土器②	27
写真11 撥乱層・表土出土土器③	28
写真12 萩博物館所蔵鉄器①	34
写真13 萩博物館所蔵鉄器②	35
写真14 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器①	40
写真15 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器②	41
写真16 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器③・玉類	42
写真17 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器X線写真①	43
写真18 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器X線写真②	44
写真19 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器X線写真③	45

## 表目次

第三章 第154号墳の調査	
表1 萩博物館所蔵出土遺物（土器）観察表	29
表2 萩博物館所蔵出土遺物（鉄器）観察表	36
表3 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵出土遺物 (鉄器) 観察表	46

# 第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

## 第1節 地理的環境

萩市見島は、萩市浜崎港から北北西に約46.3km離れた日本海中に浮かぶ孤島である。島の平面形態は南を底辺とする不等辺三角形を呈し、南北約4.6km、東西約2.5km、島周約24.3kmを測り、総面積はおよそ7.8km<sup>2</sup>となる。

見島は火山島であり、地質は玄武岩類、角礫凝灰岩および海岸低地部の沖積層で構成される。島は中央部から西部にかけて高く、現在航空自衛隊見島分屯基地が置かれるイクラガ山（標高181m）が最高峰となっている。また、瀬戸と呼称される中央山地により南北が分断されており、島の南部および北東部に見られる湾入部周域には僅かながら冲積低地が形成されている。それぞれに本村・宇津の集落が発達し、現在でも島への数少ない出入り口として存在する。

これら海岸域にある天然の低地には、島涙を洗う波浪から生じた岩屑が砂礫浜堤や礫浜堤を形成している。見島ジーコンボ古墳群は、島の南岸線東端の晩台山南麓から、本村港の東にある孤立丘高見山の東麓までの間に形成された、東西長約300m、幅約50m～100m、標高約7mの礫浜堤（横浦海岸）に立地している。

## 第2節 歴史的環境

### 1. 遺跡の分布状況（図1）

見島に埋存する遺跡の様相については、ジーコンボ古墳群以外は全く明らかとなっていないと言っても過言では無からう。現在公表されている埋蔵文化財包蔵地の分布についても、山口県教育委員会と萩市教育委員会が昭和35年（1960）から同37年（1962）まで実施した合同調査に負うところが大きい。

見島における踏査は、昭和35年合同調査の9月4日から3日間にかけて実施したとされる。『見島総合学術調査報告書』では、その成果として島内の13地点が紹介されているが、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地と照合すると、「見島小学校々庭付近の遺物包含層」「薬師堂背後の遺物包含層」「見島体育館付近の遺物散布地」が見島本村遺跡（図1の1）、「木村東区の遺物散布地と包含層」「本村部落の東部の水山」「杉山西南斜面の遺物散布地」が堅田遺跡（図1の2）、「片尻の遺物散布地」が片尻遺跡（図1の6）、「草谷の遺物散布地」が草谷遺跡（図1の7）、「船戸の遺物散布地」が船戸遺跡（図1の9）、「船見田の遺物散布地」が船見田遺跡（図1の10）、「大竹の遺物散布地」が大竹遺跡（図1の11）、「瀬田の石器発見地」が瀬田遺跡（図1の3）に該当するようである。現在の木村港と木村漁港の間にある小丘で、古く大正5年（1916）に土師器壺2点と硬卡製勾玉1点が出土したとされ、昭和35年の合同調査においても「土師器壺4点が確認された「宮崎山の遺物散布地」は、その後明確な資料の採取に恵まれなかつたのか現在では包蔵地から除外されている。また、合同調査における踏査がジーコンボ古墳群発掘調査の前提としての「見島における居住の時代的上限」「古墳の構造に先行する文化の有無」「当時の地形や島の生産力」「村落の規模とその継続期間」の確認等に目的を置いていたためか、当時既にその位置が推定されていた中世の城館跡である要害山城跡（図1の4）、高見山城跡（図1の5）に関して言及されていない。なお、平成元年（1989）発行の『萩市史』第2巻では、要害山城跡の北北西約1kmの丘陵上に

土壘・石垣が見られることから、城跡の存在が指摘されている(図1の8)。

以上、見島において確認されている遺跡の分布状況を概観した。居住に適した低地が狭小である見島においては、工事中の埋蔵文化財の発見もやはり限定的な地域に限られるようであり、昭和35年以降の新知見もほぼ存しない状況と言える。

## 2. 見島ジーコンボ古墳群造営以前の見島

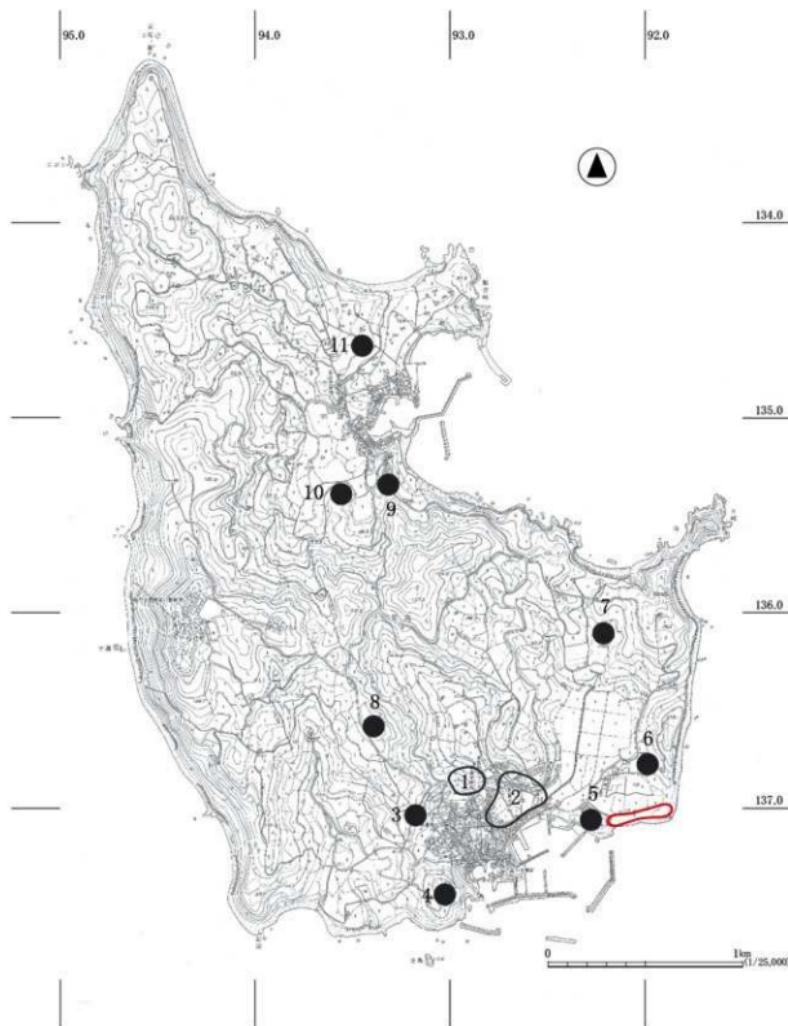
前述したように、萩市見島においてはジーコンボ古墳群以外の遺跡に未だ調査の鉢が入れられていない。そのため、各遺跡で採取された断片的な資料からジーコンボ古墳群造営以前の様相を推し量る他手段がないようである。

萩市見島発見の先史時代遺物に関しては、平成元年(1989)発行の『萩市史』に詳しい。同書によると、昭和35年(1960)より開始された合同調査の段階では、弥生時代以前に所属する遺物は同年に本村寺山南麓の宅地(図1の3)で小学生児童により発見された環状石斧の1点に限られた状態であったが、昭和45年(1970)に本村の中国電力島内発電所の増築工事にて縄文時代中期に比定される土器片が、昭和59年(1984)には見島小学校南方の水田基盤整備工事にて、遺物包含層と見られる黒褐色粘土層中から縄文時代後晩期の土器片とともに石棒片、打製石斧、石錐、そして環状石斧片などが出土したとされる。両地点とも現在の翠山遺跡(図1の2)内に位置しており、見島における人類活動が島南端の沖積低地部において開始されたことを示唆する重要な資料となっている。弥生時代の遺物については、同じく見島小学校南方水田基盤工事で確認された黒褐色粘土層中から弥生時代前・後期の土器片が出土しているが、その総量はさして多くない。占墳時代の遺物も、やはり堅田遺跡を中心に多数の土師器、須恵器が採集されている状況である。昭和35年調査に伴い実施された踏査で、現在見島本村遺跡と命名されている地点で確認された多数の遺物も、主として当時代に所属するものと推される。

上記の資料はいずれも正式な発掘調査を経ずしての採集品であり、遺構の確認がなされていない状況下では見島の先史時代について多くを語り得ない。現状としては、見島では古く縄文時代中期から弥生時代にかけ、本土に面する木村周辺域において少なくとも一時的な人類の上陸活動が行われ、古墳時代に至ると小規模ではあるが同地域に集落が形成され定住生活が行われたものと推察するに止めたい。

### 【注】

- 1) 地理的環境は文献8による。
- 2) 文献8 400～402頁
- 3) ジーコンボ古墳群に関する最初期の報告は大正12年(1923)に三輪善之助氏によってなされている(文献15)が、その文中に「古墳」の項目で宮崎山出土遺物が紹介されている。
- 4) 合同調査前年である昭和34年(1959)に発行された『萩市誌』(文献5)には、明確な位置は記されていないが城山址として高見山城跡の存在が、古城址として要害山城跡の存在が記されている。また平成元年(1989)発行の『萩市史』第2巻(文献11)では、本村北西部のみのぼし山(最高点:標高130m)山上に土壘・石垣が構築されていることが指摘され、「みのぼし山城」の仮名が付されているが、埋蔵文化財埋蔵地名としては「要害山城跡」が用いられている。
- 5) 大正15年(1926)に実施された山高郡土史研究会による見島の調査報告(文献13)には見島小学校敷地(現:見島総合センター敷地)にて採取されたとされる弥生土器が報告されており、本村宮崎山での弥生土器採取にも言及されている。同じく向地について、昭和10年(1935)の山本博氏の報告(文献16)には土器実測図が付されているが、直ちに「弥生土器」とは判じがたいものであり、現在資料の所在も不明確であることから『萩市史』では確実な資料として認めていない。



## 国指定 史跡 見島ジーコンボ古墳群

- |                      |                  |
|----------------------|------------------|
| 1 見島本村遺跡 集落跡 (绳文～中世) | 7 草谷遺跡 散布地       |
| 2 整田遺跡 散布地 (绳文～古代)   | 8 要害山城跡 城館跡 (中世) |
| 3 瀬田遺跡 散布地 (弥生)      | 9 船戸遺跡 散布地       |
| 4 要害山城跡 城館跡 (中世)     | 10 船見田遺跡 散布地     |
| 5 高見山城跡 城館跡 (中世)     | 11 大竹遺跡 散布地      |
| 6 片尻遺跡 散布地           |                  |

前市(1971)『前市地圖附7』(国土整備局編)を転載・加筆

図1 萩市見島遺跡分布図

## 第II章 既往調査の概要

### 第1節 戰前の調査・報告

見島ジーコンボ古墳群は、古く大正12年(1923)の三輪善之助氏による報告により学界の知るところとなつた。短文でもあることからここに全文を転載する。

「積石塚 村内大字権現字ジコンボと稱する地點に一群の積石塚があつて、塚は五寸内外の丸石で積まれてゐますが、今は其積石が壊れて粗製組合石棺が二十基程露出して居ります。其石棺は大抵外徑長十八・幅三尺、深三尺位で蓋石は三枚、四壁は十五六枚程の石で組立てられ、内部から祝部土器又は朝鮮式陶器と稱すべき硬質鼠色の土器片が發見せられます。」

この文章は「見島出身者である長松正一氏に代わり報告」したものであるため、考古学や郷土史研究等に大きな足跡を残した三輪善之助氏が実見した上でのものではないようであるが、積石による塚の存在、内部主体の構造を詳細に報告している点で極めて貴重な史料となっている。

その後、大正15年(1926)7月に実施された山高郷土史研究会による見島の調査において「ジコンボと呼ばれる古墳群が石槨の残っているものだけでも約160基存在する」「破壊されたもの、未発掘のものを合わせればその数が200基にのぼるであろう」「主体部の方位には判然たる関係は認められないが、入口を南或いはその東西に向けるものが三分の一、西或いはその南北に向けるものが約三分の一である」等、古墳群の造営に対する的確な調査成績が残されている。また、この報告内には大正12年(1923)に発掘されたという2基の墳墓に関する情報が掲載されている。見島ジーコンボ古墳群初の発掘記録であるため、ここにその概要を紹介しておく。

#### 【A墳】

- 主体部 全長十尺(約3.03m) 中央幅二尺四寸(約0.73m) 奥幅二尺五寸(0.76m)  
入口高二尺(約0.91m) 中央高三尺六寸(約1.09m) 奥高四尺(約1.21m)  
奥壁は高さ三尺(約0.91m)、幅二尺五寸(約0.76m)の1枚石  
天井石は長さ二尺前後(約0.61m)、幅二尺五六寸(約0.76~0.79m)のものが4枚残る  
入口は東南方向で、狭道を持たない横穴式石槨
- 遺物 ・祝部土器(須恵器)1点  
全高五寸四分(約16.4cm) 口径二寸(約6.1cm) 口縁高一寸一分(約3.3cm) 底径二寸八分(約8.5cm)  
・鉄製刀子1点  
茎の大部分を欠失する 残長二寸五分(約7.6cm)  
・鉄鎌1点  
茎部と身部を残す 茎の断面は円形で身部は丸みを帯びて厚い 残長五寸(約15.2cm)  
・人骨2例 壮年の男性・壮年の女性

#### 【B墳】

- 主体部 全長十一尺(約3.33m)  
入口幅二尺七寸(0.82m) 奥幅二尺四寸(約0.73m) 奥高二尺八寸(約0.85m)  
入口は西南方向で、構造はA墳と同様
- 遺物 現存しない

以上の内容を見たとき、大正12年になされた三輪氏の詳細な報告が、同年に実施されたA・B2基の墳墓の発掘成果を基としたものと容易に想像されるのである。なお、この発掘されたA墳・B墳が、昭和35年(1960)から37年(1962)にかけての合同調査で確認された182基の墳墓(図2)の内のいずれに該当するかは不明と言わざるを得ない。

その後、昭和9年(1934)8月には当時萩高校教諭であった山本博氏が見島を訪れ、翌年『考古学雑誌』上に古墳群出土資料の報告を行っている。報告には昭和8年(1933)7月11日の発掘により出土したとされる遺物の詳細が記されており、以下にその概要を記す。

#### 【不明古墳】

○主体部 不明

○遺物 祝神土器(須恵器)完形3点 磁片少々

直刀断片1口

青銅(銅)製帶金具…鉄具1点 銀尾1点 巡方4点 丸輪8点 猪目金具1点

鉢蓋蓋身部1点※共伴遺物でない可能性有り

山本氏の報告には金属器類の実測図とともにその写真も掲載されている。銅製帶金具の完帶出土という極めて稀な資料であり、昭和11年4月に東京帝室博物館に出展されたそうであるが、現在の所在は不明のようである。

以上が文献に見られる戦前のジーコンボ古墳群の記録である。記録上は3基の主体部が発掘されていることが明らかであるが、この他にも『見島総合学術調査報告』には大正時代やその後の堤防工事または植樹事業等で出土し、旧萩市郷土博物館や個人蔵となっている資料が紹介されており、学術誌への報告以降も遺跡の破壊が進行したことを物語っている。

## 第2節 戦後の調査

戦後、遺跡の破壊状況を危惧した山口県教育委員会は、萩市教育委員会との合同で実施する総合学術調査にジーコンボ古墳群の調査を含めることを決定した。

調査は、齊藤忠および小野忠熙を中心に考古班が組織され、山口大学生諸氏の協力のもと、昭和35年(1960)から37年(1962)の3ヶ年にかけて実施された。初年度は古墳分布図の作製、次年度は古墳群西北端部に露出する組合式石棺状の埋葬施設10基(123・124・128・137・151・152・153・154・155・156号墳)が調査され、最終年度は古墳群東南端部に分布する横穴式石棺状の埋葬施設8基(1・44・56・57・77・81・105・116号墳)が調査された。

見島ジーコンボ古墳群における初の学術発掘調査成果は、昭和39年(1964)に山口県教育委員会により刊行された『見島総合学術調査報告』で公開されることになるが、発行年が古いこともあり、現在では入手困難な状況になっている。よってここに調査の概要をまとめておく。

#### 【調査期間】

○第1年度 昭和35年(1960)9月2日～9月6日

○第2年度 昭和36年(1961)8月29日～9月5日

○第3年度 昭和37年(1962)8月29日～9月4日

#### 【分布】

○第1年度 石室162基・石室と断定しがたいものの12基の計174基を確認。

○第2・3年度 新たに発見されたもの8基を追加。総数182基を確認。

### 【第1号墳】

○主体部 奥行き1.45m 幅0.48~0.65m 高さ0.65~0.88m

方位 S27° E ※本文にも「南東に面している」と記されているが、付された平面図を見ると南西に面している

床面は難床 天井石は遺存しない

○遺物 須恵器16(石室入口付近から出土。高台付壺など)

銅製金具 銀貝1点 途方(大)4点 途方(小)2点 丸輪(大)4点 丸輪(小)2点

鉄刀 2口 銀尻金具・鏡・青銅鏡・足金物など

人骨(須蓋骨・歯牙の小片)

### 【第44号墳】

○主体部 奥行き3.31m 幅0.5~0.71m 高さ0.95~1.12m 平面形は入口がやや広い台形

方位 S8° W

床面は難床 天井石は2個遺存し、1個石室内に転落

○遺物 須恵器102点(壺・高台付壺など) 土師器4点

鉄刀や鉄器片など

人骨片

### 【第56号墳】

○墳丘 砂羅・土砂による封土(積石)あり

○主体部 奥行き3.30m 幅0.6~0.83m、高さ0.90~1.28m

方位 S59° E ※本文にも「南東に入口を向いている」と記されているが、付された平面図を見ると南西に向いている

天井石は2個遺存

内部堆積土 表土…石室外部から流入した土砂が堆積し、雜草が覆う

上層…暗茶色砂羅層

間層…厚さ2~3cmの第1黒色砂羅層が堆積

中層…厚さ5~10cmの砂羅層

下層…円錐を底に詰めた(難床?)上に厚さ10cm程度の炭を大量に含んだ第2黒色砂羅層が堆積

床面の上部に2回の迴轉跡(第1・第2掲色砂羅層)が見られる

○遺物 上層…須恵器・土師器・陶器・鐵器・人骨片・馬の臼歯など

中層…遺物包含量が少ない

下層(床面)…須恵器71点 土師器多数 施釉陶器片數片

※上記は上～下層の總数か(本文中に「接合されることが多い」との記述あり)

硬下腰勾下2点

全銅製釦子1点 青銅製釦1点 青銅製ヒ1点

石製帶金具…蛇尾1 巡方2 丸輪5

銭貨…神功開宝2 陳平永宝1 承和昌宝1 貞觀永宝1

鍔手刀1点 鉄製刀子1点 鉄劍片6個体程度

有孔貝製品1点

人骨齒

## 【番外15号墳】

○主体部 幅0.6m 高さ約0.9m

床面は羅床

○遺物 床面…須恵器・土師器・陶器

馬の齒牙多款

## 【第57号墳】

○主体部 石室両端(玄門・奥壁)は破壊されている 幅約0.4m

天井石は1個遺存 床面は羅床

方位は南面

○遺物 須恵器片9点

## 【番外16号墳】

○主体部 石室両端(玄門・奥壁)は破壊されている 幅約0.4m

天井石は1個遺存 床面は羅床

方位は南面

○遺物 須恵器片141点 上師器片若干 施釉陶器4個体分

## 【第77号墳】

○主体部 奥行き2.11m(掲載図による) 幅0.4m(本文中は「奥行」) 高さ1.35~1.38m

方位 S32° E

天井石は2個遺存し、2個が石室内に転落 床面は羅床

○遺物 須恵器片89点 土師器片11点

人骨齒片 頭部があつたと思われる付近に枕石とも見える径20cm内外の甕が4点

## 【第81号墳】

○墳丘 積石が若干覆う

○主体部 奥行き2.75m 幅0.34~0.52m 高さ1.0m~1.05m

方位 S25° W

天井石は4個遺存し、3個が石室内に転落 床面は羅床

○遺物 須恵器片82点(杯・壺など) 土師器片1点

鉄製刀子1点(貴金属・帶執金具・魚形金具遺存) 小刀子3点

人骨齒片(2体分)

## 【第105号墳】

○墳丘 周辺に積石が見られる

○主体部 奥行き3.12m 幅0.51~0.83m 高さ0.83~0.96m

方位 S19° W

天井石は1個遺存し、1個が転落している 床面は2層羅床が形成される

○遺物 石室蓋盤面…鉄製品1点 人骨1片

羅床中…須恵器多数 土師器片3点 人骨片約20 齒牙約30

羅床上面…須恵器完形1点と破片多数 人骨齒若干

(この他本文中に「床面から、須恵器片160、土師器碎片1、煙土中から須恵器片24片、施釉鉢1個が出土」とある)

※下層の羅床の中から成人の骨に混ざって小児の齒牙が出土

## 【第116号墳】

○主体部 奥行き3.15m 幅0.35~0.75m 高さ0.79~0.87m

方位 S14° W

天井石は2個遺存し、1個が石室内に転落 床面は径10cmの縦を数いた築床

○遺物 献意器片52点(完形の高台付坏・蓋含む) 上師器片2点

銅鏡1点

銀製耳環1点 銅地金張耳環1点 ガラス丸玉2点 ガラス小玉47点 貝輪1点

人骨片

## 【第123号墳】

○調査 昭和36年(1961)9月4~6日

○主体部 奥行き約3.75m 幅0.82m(奥壁付近) 高さ1.03m

方位 ほぼ西面

天井石は2個遺存し、2個が石室に転落 床面は径5cmの縦を数いた築床

○遺物 床面…献意器(蓋4点・蓋坏1点・坏2点・提抜?片1点・高坏1点) 上師器(高坏1点・掩2点・坏1点)

銅鐘2点 丸玉2点 小玉47点 貝輪2点(第116号墳出土品と混同している可能性あり)

滑石製紡錘車1点

鉄鍔1点 鉄刀1口 鉄織3点(1個体分か)

人骨片

(この他本文中に「献意器片332点、上師器片5点」とある)

## 【第124号墳】

○埴丘 天井石上に積石遺存

○主体部 奥行き2.78m 幅0.4~0.5m 高さ0.35~0.50m 横穴式石室の系統ではあるが一種の組合箱式石棺に似る

方位 S80° Wで西南西に向く 基付された平面図では西北西に向いている

天井石は1個遺存 床面は径2~5cmの縦を数いた築床

○遺物 床面…献意器片(蓋6点・掩2点)

鉄刀断片

人骨

(この他本文中に「献意器片は267片」とある)

## 【第128号墳】

○埴丘 石室周囲に積石が遺存

○主体部 奥行き3.3m 幅0.32~0.53m 高さ0.56m

方位 S19° W

天井石は1個遺存 床面は径2~5cmの縦を数いた築床

○遺物 床面…献意器片130点(蓋・蓋坏・掩) 十郎醫鏡1点

鉄織4点

人骨片 犬の頭骨・下顎骨

流土…献意器片290点 上師器片(坏)

## 【第137号墳】

○埴丘 石室周囲に低く遺存

○主体部 奥行き3.6m 幅0.5~0.65m 高さ0.65m

基底部が浜面であり、石室は浜場の上に構築されている

方位 S37° W

天井石は4個が石室内に転落 床面は径2~5cmの礫を敷いた碌床

○遺物 献惣器片50点(蓋1点・环1点・椀4点・瓦器に近い須恵質土器) 上師器片少量(椀)

不明鉄製品断片

人骨

### 【第151号墳】

○主体部 奥行き約3.8m 幅0.75~0.9m 高さ0.53m

方位 S65° W

天井石・奥壁・人口部とも遺存しない 側石は大部分割石で構築 床面は小礫を含んだ厚さ2~3cmの黒色土

○遺物 床面…須恵器片13点(蓋・环・高台付环・甕) 上師器片若干

鉄製金具10点 刀子1点 球頭柄頭1点 鉄刀片2点 鉄織断片

金環2点

綱の跡こぼれ1点

人骨片 齒牙17点(成人2体分か)

波上…須恵器片200点

### 【第152号墳】

○主体部 奥行き約3.27m 幅0.63~0.72m 高さ平均0.53m

方位 S20° W

擾乱が激しく、大井石は遺存しない 床面は砂利敷きか

○遺物 塚石室内外の流土から出土

須恵器片103点(蓋・蓋・环・高台付环・椀・高环) 土師器片36点(环・椀) 瓦器片4点

刀子状鉄器片1点 鉄織片1点 不明鉄器片少量

### 【第153号墳】

○主体部 奥行き2.9m 幅0.82~0.89m 高さ0.4~0.47m

方位 南西に面する

天井石は1個が石室内に転落 床面は碌床で北東側に低く傾斜する

○遺物 塚石室内に充填した二次堆積の疊中から出土

須恵器片65点(椀・蓋・环・高环) 土師器片10点(椀・环)

銅製椀1点(4片若しくは5片に破損)

鉄刀片6点 鉄織片72点 不明鉄製品片1点

### 【第154号墳】※本書所収

### 【第155号墳】

○主体部 奥行き2.58m 幅0.75~0.9m 高さ0.5m

方位S76° W

石室南西半部は植林により破壊 天井石は遺存しない 床面は砂利を含んだ黒色土層

○遺物 塚床面と堆積土疊から出土したもの

須恵器片12点

鉄刀1口(4片に破損) 刀子2点 銅製賈金具1点 銅製鈴1点

鐵鏃若しくは刀子の破片多数

銅環1点

人骨片多数 齒牙39点(成人2体と幼児1体分か)

### 【第156号墳】

○主体部 奥行き1.65m 幅0.43~0.45m 高さ約0.45m

方位S67°W

天井石は遺存しない 床面は小石を含んだ黒色土

○遺物 床面…須恵器79点(甕・平瓶・壺・环・高台付环) 十師器1点

流土中…須恵器片

以上、出土遺物を中心に昭和35年より3ヶ年に及び実施された調査の概要を記した。さらに『見島総合学術調査報告』では、見島ジーコンボ古墳群に見られる各石室の構造を

○A式 玄室と羨道の区別は不明確であるが、明らかに横穴式石室の影響を思わせるもの。

△I類…奥壁や側石の石材が大きく、石室高も高く、豊富な副葬品を有するもの。

△II類…石材が小さく粗雑な積み方で、石室空間も狭く、単純な副葬品を有するもの。

○B式 石塊や削石を一重に並べて箱形にぐんだもの。組合せ式箱式石棺に近い形状。

△I類…扁平な石だけで側石を構築する。

△II類…扁平な石以外に不整形な石塊も使用する。I・II類に出土遺物の差は見られない。と分類し、被葬者の社会的地位、そして出土遺物に明確な時期差が見いだせないことを考慮しつつもA式からB式に、すなわち古墳群が東から西へと構築されたものと推察するに至っている。またその被葬者像については、「7世紀後半から10世紀にわたってある特殊な集団の移住」を想定し、「対外関係のための前進基地としての集団の駐在」をその目的として指摘している。

この調査をもってして、特徴ある地理的位置とともに古代に所属する積石塚群集墳という特殊性・副葬品に見られる被葬者の特異性が明らかとなり、広く考古学・歴史学界に注目を浴びることになったのであるが、その後昭和52年(1977)に県史跡に指定されながらも適切な保存策が施されなかつたため、遺跡は再び自然的・人為的に破壊が進行することになった。

この状況に対し、かつての景観が失われている古墳群の旧状を把握し直し、保存に必要な基礎資料の再整備を行うため、古墳群のうち示準的な3基(第16号墳・第72号墳・第113号墳)を対象に、昭和57年(1982)7月から1ヶ月間にわたり山口県教育委員会により発掘調査が実施された。

その調査報告によると、3基の主体部は横穴式石室の系譜をひく特異な構造をしており、いずれも羨道部または形骸化した羨道部を有している。石室全長は大差ないものの、玄室幅が広く天井部が高いもの(第16号墳・第72号墳)と幅狭く天井部が狭いもの(第113号墳)の2種が存在し、前者からは石鈴や鍍金された刀装具など豊富な副葬品が出土するが後者からは出土しないことから、被葬者の階層差を反映するものと指摘されている。また各墳墓より出土した土器からは明確な時期差が見い出せないことも併せて報告されている。

戦後に実施された二度の発掘調査により、見島ジーコンボ古墳群の造営年代に関しては、開始期について古く7世紀後半に求められる可能性を残すものの、その中心は9世紀前半頃に求められるに至った。しかしながら造営年代に関しては大きな問題を有している。昭和57年の調査で対象となった3基は、いずれも横穴式石室の系譜を引く主体部を有するもの(A式)であったため、昭和35~37年調査で想定

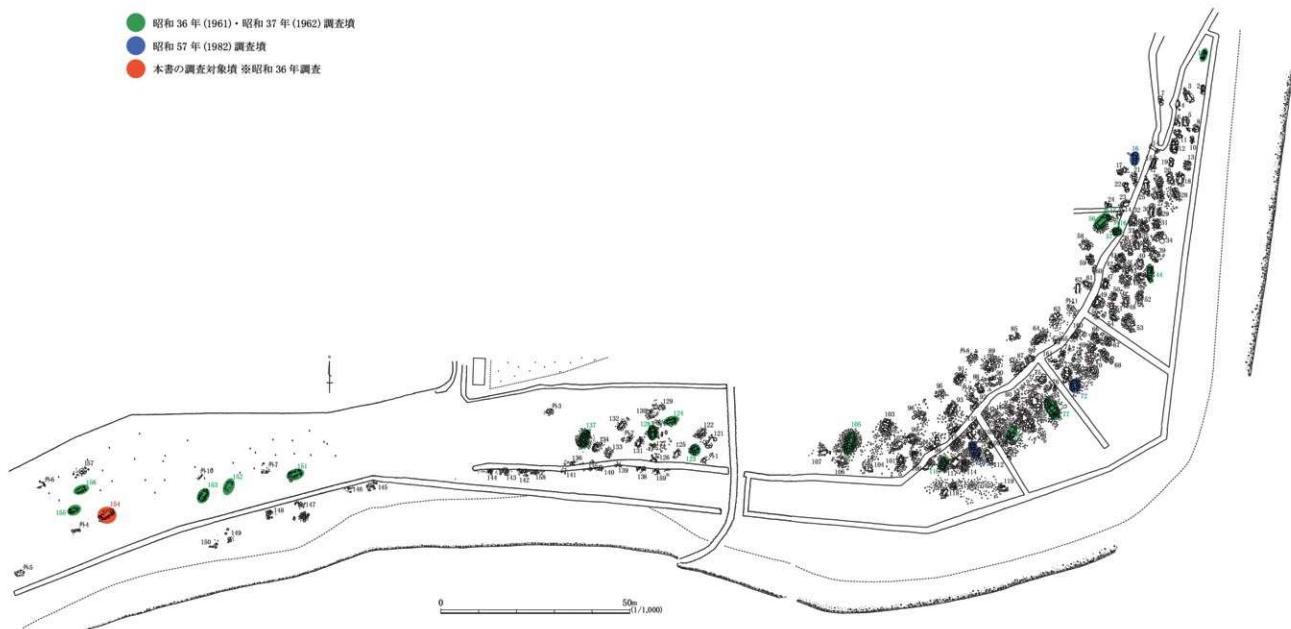


図2 見島ジ~モンボ古墳群分布図

されたA式からB式への変化、換言すると東から西への分布域の移動に關しては依然不明確な状態が続いている。これは偏に『見島総合学術報告』「考古の部」が略報色の強いものであったため、出土資料の全体像が把握できなかったことがある。

調査実施から実に半世紀の時が流れた。資料収蔵の一端を担った当館の責は重い。遅ればせながら、今ここに資料公開の第一歩を踏み出すことにする。

## 【註】

- 1) 文献15
- 2) 文献13
- 3) 文献16に「村役場員にしてその発掘に立会はれた人の話を総合するに、出土遺物の存在状態は殆んど正確に示し難き趣があり、発掘の古墳も現在は発掘者生存するを以て指示し得るが実測図など別に作られてゐないから、どの古墳であるか正確で不明に成りはしないかと思ふ。」と記されていることから見て、複数墳ではなく単墳が発掘の対象であったものと推定される。
- 4) 文献8の388頁
- 5) 『見島総合学術調査報告』には、「見島古墳群から従来発見された遺物」として銅製帶金具の写真が掲載されている(文献8の図版28-13～23)。その内容は、鉄具1・鉈尾1・巡方6・丸解7・猪目金具1であるようだが(文献8には丸解8、巡方3と記されている)、写真比較では山本氏報告帶金具とは別資料のようである。
- 6) 昭和30～32年の調査に關しては、後半「18基に対し調査が行われた」とする記述が散見されるが、文献8には第56号墳に隣接する番外15号墳、第57号墳の側石を共有して構築されている番外16号墳の調査成果も記載されている。出土遺物に關する詳細な記述もあるため、ある程度の精度を有した調査であったと推定される。また、山口大学埋蔵文化財資料館には本来調査対象外であるはずの埋葬施設番号の資料が多数収蔵されている。現状ではどの主体部に対しどの程度の調査が実施されたのか不明確と言わざるを得ない。
- 7) 周知のごとく、『見島総合学術調査報告』の「考古の部」は概要が多く、調査内容を解説する上で難解な部分が多い。また、当時の調査記録類(調査日誌・測量原図等)について、当时調査の主体であった山口県教育委員会・萩市教育委員会、そして(財)山口県埋蔵文化財センターに問い合わせたが、現時点では発見されていない。よってここに記す概要は、あくまで筆者が『見島総合学術調査報告』から解説したものであることを記しておく。
- 8) 文献12
- 9) 文献11の1145頁

## 第1節 昭和36年の現地調査

前記したごとく、見島ジーコンボ古墳群にて昭和35年(1960)から3ヶ年におよび実施された学術発掘調査では、初年度は分布調査、第2年度は分布域の西部での発掘調査、第3年度は東部での発掘調査が主として行われた。第154号墳は、第2年度にあたる昭和36年(1961)の8月29日から9月5日までの間に調査されたことになる。辛い萩博物館所蔵の出土品には注記カードが同封されており、「年月日」の項目に「19610901」「19610902」「19610903」の3種の書き込みが見られることから、調査は9月1日から9月3日にかけての3日間で実施されたものと想像される。

第154号墳が位置する古墳群西部域は、東へ中部域に比すとその分布は密とは言い難い(図2)。しかしその一方で第145～153号、番外7・10号の11基、第154～157号、番外4～6号の7基がそれぞれ支群を形成しているかのように見える。また『見島総合学術調査報告』ではこれらがB式、つまり「石塊や剣石を一重にならべて箱形にくんだもので、一見組合せ式の箱形石棺に近い形をしめしている」ものに分類され、西端部域に限って分布することが指摘されている。昭和57年(1982)に山口県教育委員会により実施された調査も横穴式石室の系譜を引くとされるA式が対象とされたため、該当域の詳細な検討は見島ジーコンボ古墳群の評価に必要不可欠と言える。

さて、現在当時の調査記録等が発見されていないため、以下に『見島総合学術調査報告』に記載された第154号墳の調査成果報告部分と付された「第34図 第154号墳石室実測図」を転載する。

**第154号墳** 高見山に近い防風林の南端に当り、第153号墳の西南西約22メートルの距離にあって、この種の形式の石室の中では最も大きい。まずははじめに、第151号横付近から西へ幅2メートル、長さ55メートルの深いトレーンにかかる第153号墳と、そのまますぐ東1、2メートルの箇所(第153号墳第2地点)を発掘した。

仮りに第2地点と呼んだ箇所には、2、3箇の石塊があたかも石室風に露出していたので掘ったのであるが、これが石室でないことがわかったので間もなく作業を中止した。しかしこの付近の浜塚の地而から、蔵金具と鉄棒状の鉄器の断片各1箇や、須恵器と十獣器の破片35箇を採集し、それらの出土状態が、第154号墳を盗掘したとき、石室内部の堆積物を掻き上げた場所であったことを示していた。

第154号墳の石室の方位はS62°Wで、奥行320センチ、幅95-115センチ、高さ45-50センチを測る幅の広い石室である。そのプランは、奥壁が広く入口が狭い彫ふくらみで入口に当る箇所に防風林の松の木があり、天井石は全く残っていない。床面は砂利と黒色土とからなる築床で、側石の深さだけ浜塚を掘り込んで石室をつくつてある。奥右には2枚の半たい自然石を紙に置き、左右それぞれ5箇の側石を1枚並べに配してあった(第34図、図版24-2)。

この古墳も発掘されているので、石室の内部に充填している延長2、3センチ内外の土の中に、須恵器や土師器と瓦器、陶器の破片も見られ、鉄刀の断片が含まれていた。しかし床面はほとんど擾乱されておらず、床面の灰黒色土の上に人骨の残片や歯牙が保存し、副葬品もかなり残っていた。

石室の擾乱層から須恵器の环の口縁部1箇と、高环の破片1箇やその他の破片7箇と、鉄刀の断片1箇を検出した。なおこの石室の須恵器は絶じて新しい時期のもので、なかには椎葉を巻いたものも1箇混っていた。床面から銅環1、鐸の断片1、鉄刀の断片5、川子1、鉄鍔の柄部30本、青玉1や小玉2箇と十獣器の环の破片5箇を検出している。

小金環1 純金製の細い丸棒を環としたもので、一方に開きがある。外径1.6センチの小形のもので、何ものかに付装したものであろう(図版29-5)。鋼製青玉具2、1は長径3.65センチ、他は長径3.2センチ、通例の形式である。

欲製刀身残片 6片ほど存し、1口分であるが、いずれも小断片で、全体の形制をうかがい得ない。

鉄鎌残片 50片ほどの小断片であるが、細身の尖根式とみなされる。いずれも小さい破片なので全体の形制や数量も明らかにされ難い。

他に、この古墳の近く表土上に帶金具が発見された。丸瓶でこの形状や大きさは、第1号墳出土例の小さい例と全く同じである。なお人骨片若干及び齒牙片が発見されている。

また擾乱層および床面から氣泡器片168片、土師器片7片、施釉陶片1片が出土した。ここでは厚手の壺、甕の破片は多くなく、口縁部片は1片出たにすぎない(第27図-8)。第27図の9・10は床面出土の長頸壺で、いずれも口唇部を欠いている。9(図版31-26)は肩部がふくれており、10は肩部から胴部にかけて「く」字形に折れている。やや八字に広がる高台がつけられている。同図-11は耳の破片で擾乱層出土である。12(図版31-27)は床面出土の小壺で肩に1縫をもっている。13、14(図版31-28・29)は床面出土の高杯で123号墳出土の例と似た形状を持つているが、13は杯部から脚部にかけてなだらかな彎曲を持ち、脚部には縦方向の割みが6条施されている。坪の壺は15にみるような椎みあわせ式のものが擾乱層の中から1点出土した以外は被せ式のもの(第27図-17)で、輪形の攝みのある例が多い。坪は床面出土の例ではへら起こによる平底またはこれに付け高台を付した例(第27図-18)が多く、擾乱した層の中からは、聞いた高台をもった鉢形らしいものの破片(第27図-19)が出ている。

土師器片で形状の知れるものはなく、擾乱層出土の施釉陶片も、縦縫のかかった破片であることがわかるのみである。

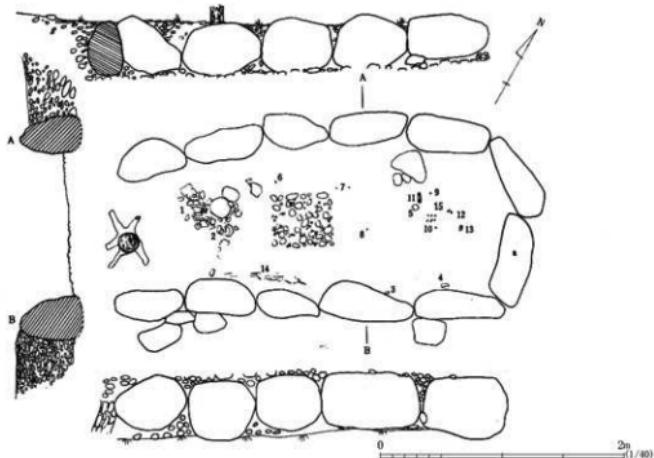


図3 第154号墳石室実測図(『見島総合学術調査報告』「第34図 第154号墳石室実測図」を転載)

上に見るよう、第154号墳の石室に関してはごく簡略的な報告しかなされていない。文章と図面から我々が知りうるのは、規模、方位、天井石や砾床の遺存状況、石室の構築方法の概要のみである。その中でも注目されるのが、昭和36年に調査が実施され「B式」に分類された石室9基(第124・128・137・151～156号墳)中、最大規模を有している点であろう。特に幅においてその特徴が顕著であり、第154号墳のみが奥壁が2枚の立石で構築されている。既往の調査で確認されたA式の石室も、奥壁は基底石1石を基本としており、その特異性が指摘できる。示された尖端圖では奥壁2石は平面「へ」の字形に配置されており、石室奥壁としてやや奇異な感を受ける。当時の調査写真(写真4)を見ると、奥壁北側石の手前には防風林であろう松が樹立しており、植樹時に石が移動させられたものとも考えられるが、追跡等に



写真1 見島総合学術調査当時(1960～1962)の見島ジーョンボ古墳群遠景(南東から)※文献8より転載



写真2 現在の見島ジーョンボ古墳群遠景(南東から)



写真3 見島総合学術調査における見島ジーョンボ古墳群調査風景(北から)※文献8より転載



写真4 発掘調査当時(1961)の第154号墳(北西から)※文献8より転載



写真5 現地保存されている第154号墳(北西から)



写真6 史跡公園となっている見島ジーメンボ古墳群西地区の現況(東から)

伴う石室再構築の可能性も現状では否定できない。

「ほとんど擾乱されていない」とされる床面は砂利と黒色土からなる疊床であったようで、特別な記述もないことから床は1面しか形成されていない、若しくは造存しない状態であったのだろう。

人井石については、古墳群西端部域に分布する2つの支群には配架された状態の人井石は遺存しておらず、現存した側石上に直接天井石が架かるのか、本来2段目以上の側石が構築されていたのかは不明と言わざるを得ない。ただし、奥壁と側壁の上面高がほぼ一致していること、そして類似する構造を有し天井石が遺存したとされる第124号墳から推測すると、遺存した側石上に直接天井石が架けられた可能性が高いと考えられる。その場合、最低でも幅約1.5m以上の巨石が天井石として必要となる。そのような巨石は、これまでに調査された他の埋葬主体でも確認されておらず、第154号墳の性格を考える上でも重要な視点となろう。

## 第2節 第154号墳の出土資料

ここでもます『見島総合学術調査報告』に記載された内容から確認しておく。『見島総合学術調査報告』『考古の部』の特徴として、各号出土の遺物に関する報告において前半部(主に金属器類に関する記述)と後半部(土器類に関する記述)に齟齬を來す場合が多いことが指摘される。分筆作業によって生じたものであろうか。以下に前半部と後半部に分け、出土遺物に関する記述をまとめておく。

### 【前半部】

【床面出土】 1. 土器類…土師器坏の破片5点

2. 鉄器類…鉄刀断片5点または6点 鐸1点 刀子1点 鉄鏃片50点(柄部30点)

3. 刀装具…銅製責金具2点

4. 裝身具…銅製(鍍金)耳環1点 管玉1点 小玉2点

5. 若干の人骨・歯牙

【擾乱層出土】 1. 土器類…須恵器:坏1点 高坏1点 破片7点

2. 鉄器類…鉄刀断片1点

### 【後半部】

土器類総数 須恵器片168点 土師器片7点 施釉陶器片1点

【床面出土】 1. 土器類…須恵器:長頸壺2点 短頸壺1点 高坏2点 高台付坏が多い(図示1点)

【擾乱層出土】 1. 土器類…須恵器:把手1点 高台付坏(図示1点)

施釉陶器:1点

報告文章から読み解く限りでは、盜掘されているものの床面は擾乱を受けていないとの所見から、取り敢えず「床面出土」と認定できるものは埋葬時の副葬・供獻遺物と見なしておく。

さて、現在第154号墳出土資料は萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館とに分かれ収蔵されている。その経緯は定かではないが、古墳群の他の主体部出土資料を含め『見島総合学術調査報告』に図示された資料に関しては山口大学に収蔵されていないことから、『見島総合学術調査報告』刊行後に追って整理・調査・報告を行う予定の遺物が山口大学に保管されることになったものと推察される。今回実施した調査により、第154号墳の分置の別は、山口大学埋蔵文化財資料館に鉄器類総数の約1/3と管卡1点、小玉2点が収蔵され、他は萩博物館に収蔵されていることが判明した。本書では萩博物館に収蔵

される土器と両館に収蔵される鉄器、そして山口大学埋蔵文化財資料館に収蔵される玉を報告する。

## 1. 土器

今回の資料調査では、萩博物館に収蔵されている第154号墳出土土器全点(資料記号II)を確認し、床面出土品と壊乱層・表土出土品の特定を行った。方針として『見島総合学術調査報告』にて出土層が記述されており、実測図もしくは写真で原品の確認が可能であったものを最優先基準とした。次に『見島総合学術調査報告』に明確な記述はないが、遺物袋に同封されている注記カードに「床面」の記載がある資料は床面出土品として取り扱った。<sup>14</sup>また口縁部と底部に関しては小片であっても全て実測を行っている。以上の方針により、図示し得る床面出土土器は須恵器7個体、上師器4個体である。

### 【床面】(図4、写真7・8、表1)

須恵器には長頭壺、壺蓋、高台付壺、高壺がある。1は長頭壺。口縁部は打ち欠かれ残存しないが、完形に復元される資料である。肩の張る体部を有しており、肩部上位にカキ日が、下位は回転ナデが施される。頸部は内湾しつつ直立気味に立ち上がり、口縁で強く外反する。底部には外傾する高台が付されている。肩部上位と内底には緑色の自然釉が掛かっている。2も長頭壺。1同様口縁部が打ち欠かれているが、ほぼ完形に復元される。歪みが大きいが、最大径が上位にある球形の体部を有する。下位は回転ヘラ削り、中位は回転ヘラ削り後回転ナデ、上位は回転ナデが施される。頸部は外傾気味に立ち上がり、口縁付近で強く外反する。底部には強く外傾する粗雑な高台が付されている。体部外面、頸部内面の大部分に暗灰色の自然釉が掛かっている。1・2とも内面に漆痕跡等は残っていないようである。3・4は壺蓋。ともに輪状つまみをもつ。3は口縁部を欠いているが、平坦な天井部から緩い肩部を形成し口縁に至るものである。外面は天井部から肩部にかけて回転ヘラ削り調整、つまみ貼り付け後接合部付近に回転ナデを施す。4も半損品であるが、僅かに口縁が残り、復元実測が可能である。平坦な天井部から肩部で肩曲し下降するが、口縁は外に開き端部を小さく重させる。外面は天井部から肩部にかけて回転ヘラ削り調整、つまみ貼り付け後接合部に回転ナデが施される。肩部以下は回転ナデ調整。5は壺身口縁部片。底部からほぼ直線的に外傾し立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。内外面とも回転ナデ調整。6は高台付壺。口縁部を半損している。器壁の厚い底部からほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口縁部を僅かに外反させ、端部を丸くおさめる。高台は薄く外反する形態であり、底部端よりやや内側に接合する。端部は丸くおさめている。7は短脚の高壺。壺底部から直線的に立ち上がり、口縁に至る。口縁端部は丸くおさめるが、内端部に弱い面を形成する。短い脚部から強く外反して裾部に移行する。外面調整は壺底部が回転ヘラ削り、他は回転ナデが施される。

上師器は8~11の上師器壺しか存在しない。8は丸底に近い底部から内湾して口縁に至る壺である。器面調整に関しては風化が激しいため断定しがたいが、外面の底部から体部にかけては回転ヘラ削りが施されているかに観察される。9は丸底気味の底部から体部が内湾気味に立ち上がるが口縁は外反する。口縁端部は丸くおさめる。器面調整は内面には回転ナデ後に横方向のミガキが、外面も同様に回転ナデ後にミガキが施されているが、その方向は不定である。10は器高の低い壺である。緩やかな丸底気味の底部から内湾して立ち上がり、口縁端部を肥厚させ内に丸くおさめる。器面調整は8と同様である。11も器高の低い皿状の壺である。口縁部から底部にかけての破片であるが、他の2個に比して器壁が極端に厚い。平底気味の底部から外方に直線的に立ち上がり、口縁は丸くおさめる。器面調整は内外面とも口縁部を強く横ナデし、他の部位にはミガキが施されているが、風化が激しく詳細な方向が観察できず、僅かに内面底部付近に縱方向のミガキが確認されるにすぎない。外面には赤色顔料が

塗布されている。この他、土師器壺と考えられる小片が約30点存在する。復元不能であり、口縁も存在しないが、上記の資料とは接合しないことから床面にはさらに1個体以上の土師器壺が存在した可能性がある。『見島総合学術調査報告』の床面出土の「土師器の壺の破片5例」という記述は概ね妥当なものであろう。

また、注記カードに「床面」と記録される土器片の中に黒色土器が存在している。12は黒色土器A類の体部片。小片であるため器形は不明である。

#### 【搅乱層・表土】(図5・6、写真9~11、表1)

『見島総合学術調査報告』に「搅乱層出土」と明記されているもの、そして遺物注記カードの「遺構・樹位」部分に「154号表 I:(154号 II)」「154号棺外」と記入されているもの、そして「154号」としか記入されていないものを搅乱層・表土出土として取り扱う。図示し得る資料は、須恵器16個体である。

須恵器には蓋、壺、壺、甕、把手がある。13は蓋のつまみ部片。中央部が凹むボタン状つまみである。つまみ部外面は回転ナデが、天井部内面は不定方向のナデが施される。14は壺蓋。半損品であるがほぼ完形に復元可能である。口縁内面にかえりを持つタイプの蓋であり、床面出土の壺蓋と時期的な乖離が大きい。器高は低く扁平化しており、天井部外面中央につまみを有していた痕跡が残る。天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデが施される。なお、天井部外面には鉄錆らしきものが付着している。15~18は蓋口縁部片である。15は口縁端部を下方に軽くつまみ出しており、口縁内端を丸くおさめる。外面調整は口縁付近まで回転ヘラ削りが施されている。なお口縁外面1cmの範囲に自然釉が掛かっており、本品が重ね焼かれたことを物語っている。16も15と同タイプの口縁部片であるが、外面調整は回転ナデが施される。17は低い天井部から口縁を弱く外反させている。器面調整は天井部外面が回転ヘラ削り後ナデ、他は回転ナデ。18は天井部から直線的に口縁に窄り、稜を形成し端部を下垂させている。器面調整は外面口縁までが回転ヘラ削り、口縁端部から内面は回転ナデ。外面には縱方向に板状工具の押圧痕跡が見られる。19~24は壺の身部。19は高台付壺。体部~口縁部を部分的に欠失するが、完形に復元される。分厚い底部に比して薄い体部が内湾気味に立ち上がり口縁に至る。底部には外に開く薄く高い高台が付けられている。全面的に器面調整は回転ナデ、内面見込部には不定方向ナデが施されるが、高台内面はヘラ削りがなされている。20は壺口縁部片。内湾気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。器面調整は外面が回転ヘラ削り後回転ナデ、口縁から内面にかけては回転ナデ。21も壺口縁部片。内湾して口縁端部に窄る。器面調整は全面回転ナデ。22は高台付壺底部片。器壁が厚く、底部から直立気味に体部が立ち上がる。低くやや外に開く高台を有する。23も高台付壺底部片。内湾する高台はやや高めであり、内端部を肥厚させる。底部内面は不定方向のナデ、体部外面および高台は回転ナデ、底部外面は回転ヘラ削りが施されている。なお、底部外面には全面に自然釉が掛かっており、倒置して焼成されたことが分かる。24高台付壺底部片。底部外方に断面長方形の低い高台が付けられている。底部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデが施されている。25は長頸甕の頸部~口縁部片と思われる。直線的に外に開く頸部から口縁部を強く外反させる。全面回転ナデ調整であり、部分的に不定方向のナデが入る。26は甕把手か。成形が粗く、全面に自然釉が掛かる。27は甕または甕の口縁部片。外反する口縁で端部に面を形成する。外面口縁下端部に断面三角形の突縁を一重巡らせる。28・29は甕底部~体部片。28は外面全面に自然釉が掛かるが、下位は回転ヘラ削り、上部は回転ナデが施されているようである。29は耳を有する甕の肩部の可能性もあるが、自然釉の流れからここでは底部片として掲載する。底部外端には打ち欠かれた目状の粘土が付着している。なお、28・29は同一個体の可能性も有している。

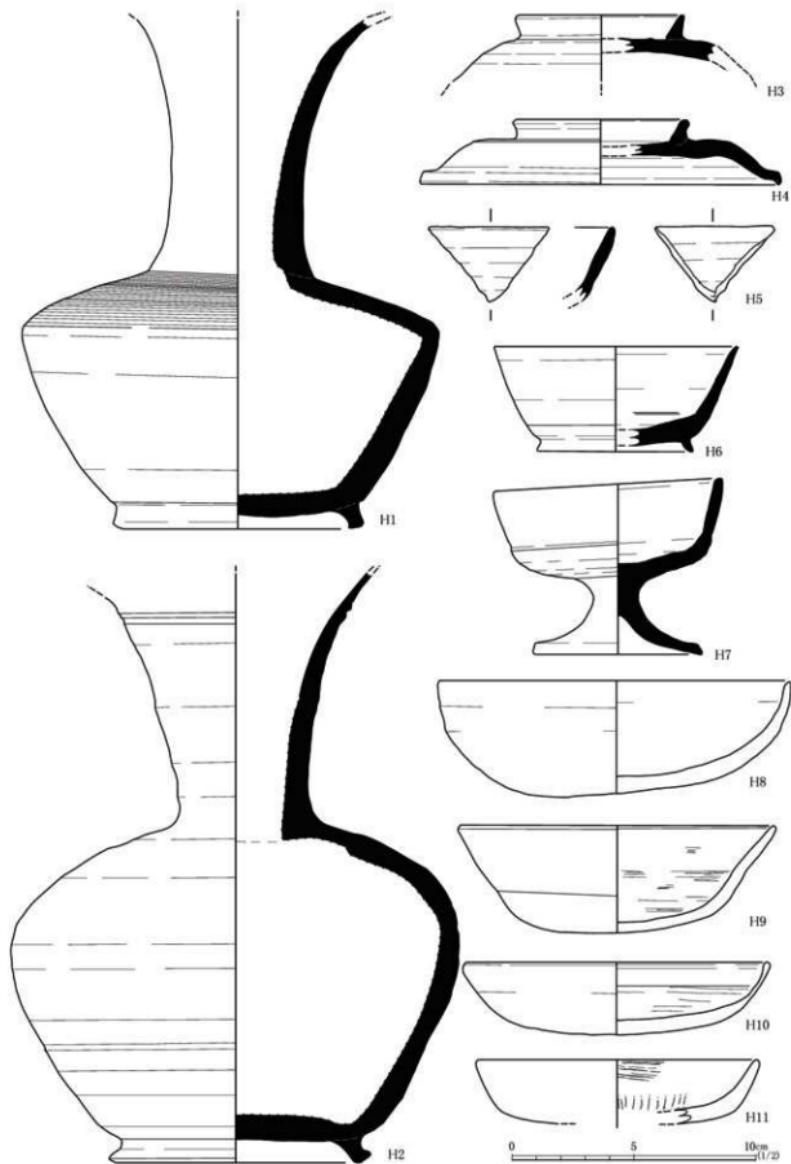


図4 床面出土土器実測図



写真7 床面出土土器①



H6



H7



H8



H9



H10

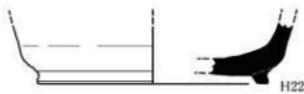
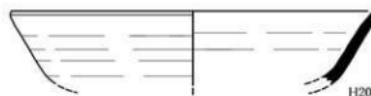
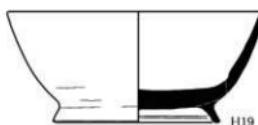


H11a



H11b

写真8 床面出土土器②



0 5 10cm (1/2)

図5 挿乱層・表土出土土器実測図①

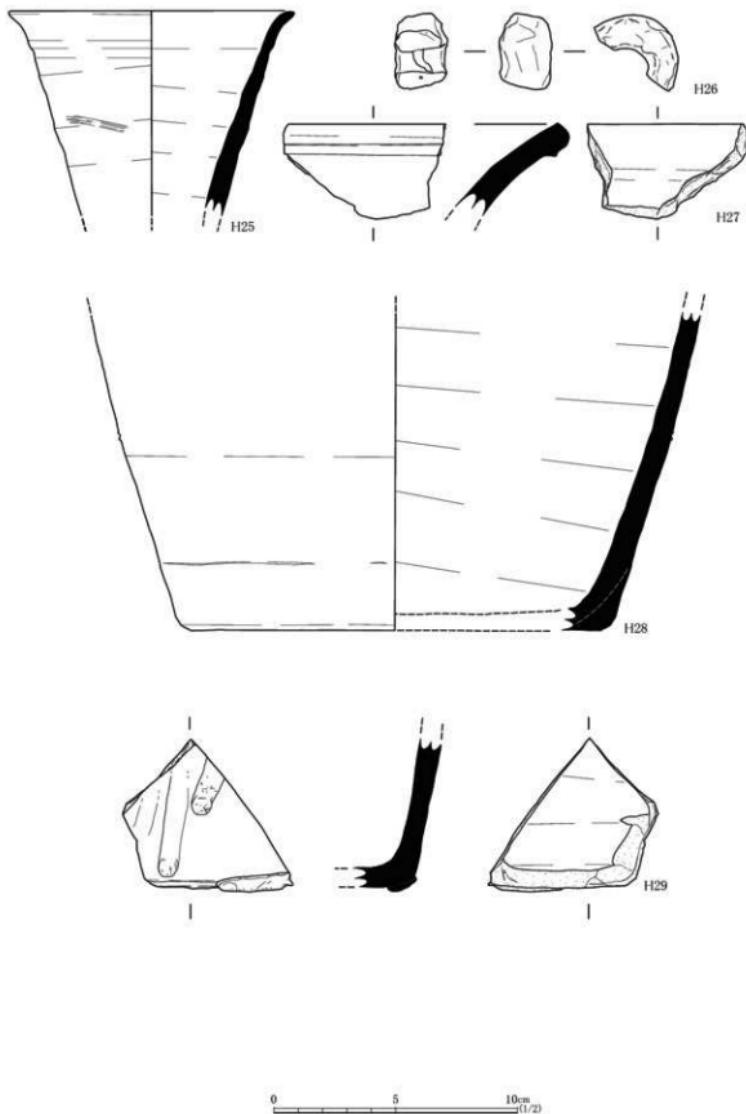


図6 挿乱層・表土出土土器実測図②

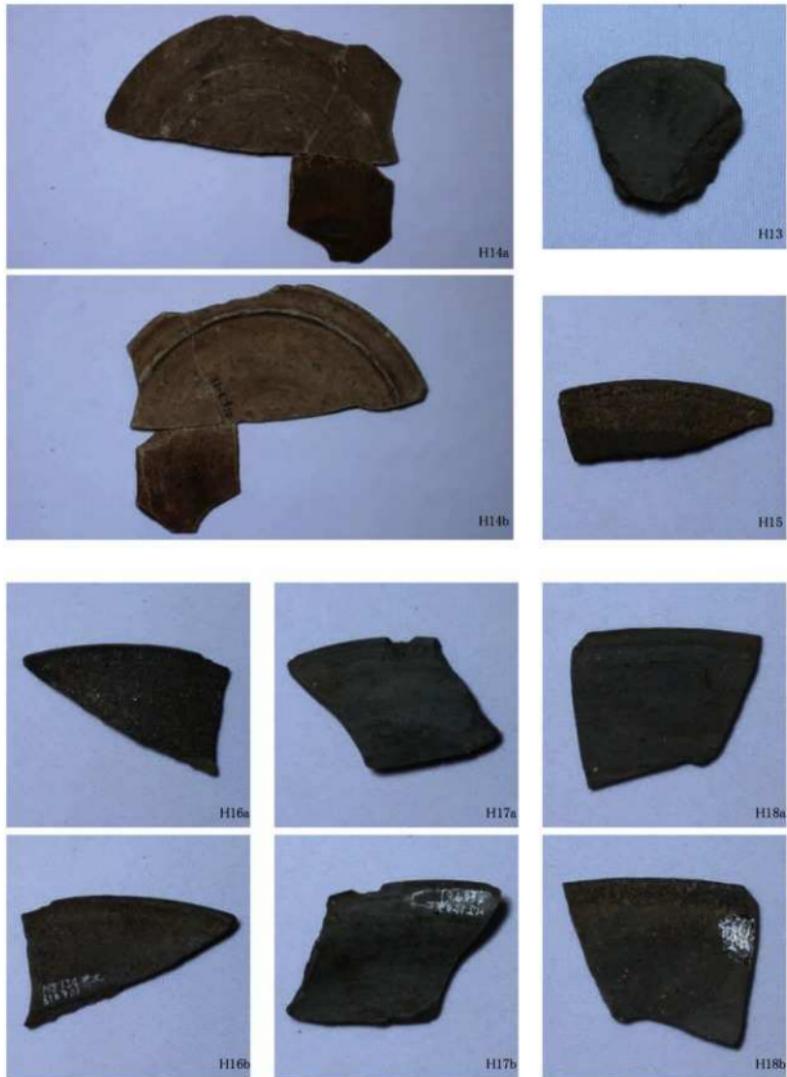


写真9 挿乱層・表土出土土器①

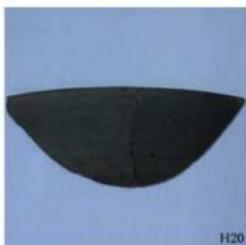


写真 10 撹乱層・表土出土土器②



写真 11 撹乱層・表土出土土器③

表1 萩博物館所蔵出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値 △は残存値

文物番号	遺物・部位	器種	部位	法量( ) △(回転部底面直径)	色調	胎土	施成	備考
H1	154号墳 床面	須恵器 長頸壺	頸部 一底部	②9.1△高台接合部 ③△20.9 肩部最大径19.1	①2灰白色(SV1/1) ②暗赤褐色オーリーダー灰色 (SV1/3)	密	良好	肩部上位にカヌメ有り。肩部の内面底部 に自然釉付着。完全に復元されている ため、内エッジに過去の回転軸跡
H2	154号墳 床面	須恵器 長頸壺	頸部 一底部	②9.2△△24.2 肩部最大径18.35	①②黄灰色(2.SV6/1) 輪郭部内外 嵌褐色(N3/3)	密	良好	口縁部内面上部の大部分に自然釉 付着。高台のつくりは粗悪。完全に復 元されているため、内エッジは過去の回 転軸跡
H3	154号墳 床面	須恵器 輪状つまみ付杯壺	つまみ部 一底部	①△2.7 つまみ径 6.9	①黒褐色(2.SV3/2) ②黄灰色(2.SV1/1) ③(14.6)△2.7 つまみ径(7.0)	密	良好	天井部外画面は山形ヘラケズ。輪状つ まみを貼付接合部を回転ナデ
H4	154号墳 床面	須恵器 輪状つまみ付杯壺	つまみ部 一底部	①△2.7 つまみ径 6.9	①②黄灰色(2.SV4/1) ③(14.6)△2.7 つまみ径(7.0)	密	良好	天井部外画面は山形ヘラケズ。輪状つ まみを貼付接合部を回転ナデ。天井 部内面は一方凸のナデ
H5	154号墳 床面	須恵器 杯身	口縁部 一全体	①△3.0	①②オーリーダー黑色(SV3/1) (一部オーリーダー色 (SV5/2))	密	良好	全体を回転ナデ。口縁部のみ弱い回転 ナデを追加したように見える。
H6	154号	須恵器 杯身	口縁部 一全体	①△9.9△高台径(6.0) ②△4.3	①灰オーリーダー色(SV1/2) ②灰色(SV4/1)	密	良好	内面面に粘土結合痕と思われる沈線が 走る。
H7	154号	須恵器 高杯	完形	①△9.2△6.8△7.3	①②灰色(SV6/1)	密	良好	杯底部外面の回転ヘラケズを脚部 の回転ナデで補強
H8	154号	土師器 杯	ほぼ完形	①△4.4△4.8	①②明赤褐色(SYR5/6)	密	やや軟	全体的に厚壁で、おもに脚部は不明瞭 で、口縁部が少し回転ナデ有り。
H9	154号墳 床面	土師器 杯	ほぼ完形	①△12.8△3.4	①橙色(7.SV8E/6) ②明橙色(7.SV8R5/6)	密	やや軟	内外とも厚壁で、口縁部は不明瞭だが、 底にミガサと同様ナデがある。ロゴ縁部 以外の全面にミガサか?
H10	154号墳 床面	土師器 杯	ほぼ完形	①△12.3△3.0	①②にぶい黄褐色 (10YRS/4)	密	やや軟	口縁部は回転ナデ。内部面は横位、 外表面は不定方向のミガサ。
H11	154号墳 床面	土師器 杯	口縁部 一底部	①(11.4)△(2.6)	①明赤褐色(SYR5/6) ②橙色(7.SV8E/6)	密	やや軟	全体的に厚壁で、おもに脚部は不明瞭 で、口縁部が少し回転ナデ有り。
H12	154号墳 床面	黒色土器	全体					内面のみ黒。細片。
H13	154号	須恵器 杯蓋	つまみ部	つまみ径(3.1)	①②灰色(SV5/1)	密	良好	
H14	154号	須恵器 つまみ付杯壺	口縁部 一全体	①(11.8)△△1.6	①暗黃色(2.SV4/2) ②黃褐色(2.SV5/3)	密	良好	口縁部と内面回転ナデ。天井部外面 回転ヘラケズ。つまみ部へ統くから れる立ち上がりがある。外面部に埋没時 付いたとされる鉄錆が付着。
H15	154号表土 (154のⅡ)	須恵器 杯蓋	口縁部	①△1.5	①黄灰色(2.SV4/1) ②灰色(SV1/1)	密	良好	外表面端部から約1cmの幅で自然釉の付 着帯がめぐる。焼成時の重なりと推定さ れる。
H16	154号表土 (154のⅡ)	須恵器 杯蓋	口縁部	①△1.8	①灰色(SV4/1) ②暗灰黄色(2.SV5/2)	密	良好	外面上に薄く自然釉が付着。
H17	154号表土 (154のⅡ)	須恵器 杯蓋	口縁部 一全体	①△1.8	①綠灰色(7.SGv5/1) ②オーリーダー灰色(SGv5/1)	密	良好	天井部外面で回転ヘラケズがナデ消 された痕跡。
H18	154号	須恵器 杯蓋	口縁部	①△1.7	①灰色(10Y5/1) ②灰色(NS5/)	密	良好	外面上に板目のような痕跡有り。この内 面にオサエ有り。
H19	154号	須恵器 杯身	口縁部 一全体	①△10.5△高台径6.4 ②△4.6	①②オーリーダー灰色 (2.SV4/1)	密	良好	全体を回転ナデ後、高台内面に沈線が 1条まわる。外表面に粘土結合痕。
H20	154号	須恵器 杯身	口縁部 一全体	①(14.9)△△3.0	①灰色(NS5/) ②黄褐色(2.SV5/1)	密	良好	
H21	154号表土 (154のⅡ)	須恵器 杯身	口縁部	①△2.7	①灰色(7.5Y1/1) ②暗オーリーダー灰色 (2.5GY1/1)	密	良好	
H22	154号表土 (154のⅡ)	須恵器 高台付杯身	体部 一底部	②△2.5 高台径 (9.4)	①灰色(5SV6/1) ②灰褐色(2.SV6/2)	密	良好	外に張り出す高台の底面全体で接続。
H23	154号表土 (154のⅡ)	須恵器 高台付杯身	底部	①△1.7 高台径 (9.4)	①黄灰色(2.SV5/1) ②灰褐色(2.SV6/2) ③褐灰褐色(10YR5/1)	密	良好	高台は外に張り出す。底面は向み、両 凸部で接続する。内端部は肥厚する。
H24	154号	須恵器 高台付杯身	底部	②△1.45 高台径 (10.8)	①灰色(5Y7/1) ②灰色(7.5Y6/1)	密	良好	高台の外に端面両側で接続する。
H25	154号	須恵器 長頸壺	口縁部 一頸部	①(11.4)△△8.4	①②灰色(10Y4/1)	密	良好	全体回転ナデ。一部不定方向のナデ 有り。
H26	154号墳 床面	須恵器 蓋	把手	幅 2.2	輪 青褐色(SB1.7/1) 腹面 黑褐色(10YR3/2)	密	良好	全体に輪が多く付着。未調整か? 背面 の内側に(深さ12mm)の溝有り。
H27	154号 棺外	須恵器 蓋または 蓋	口縁部	①△3.8	①暗灰黄色(2.SV4/2) ②黄褐色(2.SV4/1)	密	良好	口縁部下端に突起がめぐる。下面はほ しんど平滑。
H28	154号表土 (154のⅡ)	須恵器 蓋	全体	②(16.8)△△18.1	①黒色(N2/1) ②灰白色(2.SV7/1)	密	良好	外表面部は輪がありめぐる。調整は不明 瞭。回転ヘラケズか? 部ナデ痕が残る。 底面は回転ヘラケズ。下面は回転ナデ。 底盤から約3cmの外面上に粘土の貼り足 り有り。
H29	154号表土 (154のⅡ)	須恵器 蓋	全体	②(19.6)△△5.8	①暗灰褐色(N3/1) ②灰黄色(2.SV6/2)	密	良好	自然釉が外面上に付く。輪の流れから底 盤と推定される。底盤外側に船子粒の 粗い溶着物有り。

## 2. 鉄器

第154号墳から出土した鉄器類は、前述したように萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分散して所蔵されている。萩博物館所蔵品では、鉄刀片2点(図8の74~77)と鏃と思われる破片1点(図8の78)、鉄鎌革部1点(図8の46)、そして鉄刀の剝離片であろう鉄片若干が土器類と共に収蔵されており、注記カードには「154号床面」との記入があった。他の資料は「154号墳」との記入がある木箱に一括して納入されていた。山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品も「154号墳」以外の情報はない。

これらの資料を報告するに当たり、『見島総合学術調査報告』を解説する限りでは鉄器に関しては「鉄刀の断片1箇」以外は床面出土と見なして良いようである。また掲載された石室実測図(図3)を見ると、南東壁沿いに「14」と番号が付された鉄鎌片らしき一群が描かれており、おおよその出土位置も推定できる。ただし、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館とに分け置かれた原因については多少の考慮が必要であろう。後述するが、両館に収蔵される鉄器の内容にはあまり差が見られない。種別で見ると、萩博物館には鉄鎌、鉄刀、鏃と思われる破片が、山口大学埋蔵文化財資料館には鉄鎌、鉄刀、刀子が収蔵されている。遺存状態にも差が見い出せず、主種の別で分類された訳でもなさそうである。残る可能性は、出土層位(床面・擾乱層)により区分された、または両者ともに床面出土であるが出土位置に違いがあるため区分された場合であろう。前者は『見島総合学術調査報告』に記載された内容と大きく異なるため、後者の可能性がより高いと判断される。よってここでは、萩博物館所蔵鉄器群(資料記号Hi)と山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器群(資料記号Yi)とに大別して報告したい。

### 【萩博物館所蔵品】(図7~8、写真12~13、表2)

Hi1~71は鉄鎌である。いずれも尖根系の長頭式鉄鎌に分類される。

Hi1~18は鎌身部の遺存する資料である。Hi1は鎌身開部付近に別個体のHi2(頭-茎部)が付着しており、自身も鋸化が激しいため形態が把握し難いが、端刃箭式の鎌身部と思われる。Hi3は頭-茎部片であり、鎌身部と茎部端を欠失する。付着するHi4は茎部端を欠くもののほぼ完形品であり、主頭鑿箭式の鎌身部を有する。Hi5は鎌身-頭部片。鎌身は主頭鑿箭式。両丸造りか。付着する鎌身-頭部片のHi6は5と方向を違えており、鎌身は片丸造りの主頭鑿箭式か。Hi7は比較的短い頭部をもつ鎌身-茎部片である。鎌身部は全面鋸に覆われている。Hi8も同様に鎌身部が鋸に覆われた鎌身-頭部片であるが、鎌身部は主頭鑿箭式と推定される。付着するHi9は鎌身部片。これも主頭鑿箭式のものであろう。Hi10~14は鎌身-頭部片であり、Hi10・Hi11・Hi13・Hi14は両丸造りの主頭鑿箭式、Hi12は端刃鑿式の鎌身部を有する。Hi16・Hi18・Hi19は頭もしくは茎部に付着した鎌身部片。主頭鑿箭式か。

Hi20~35は頭-茎部片。いずれも開部が遺存する。断面を見ると頭部は断面正方形または横長長方形、茎部は断面円形または円形に近い多角形を基本とするようである。

Hi36~45は頭部片と判断した。Hi39下部が膨らんでいるが開ではなく鋸によるものであろう。Hi44上部は断面形態から鎌身部直下が折損したものと思われる。

Hi46~71は茎部片として掲載する。Hi46・Hi47は開部端で折損した茎部片である。明確に茎部下端を残すものにはHi47・Hi48・Hi51・Hi55・Hi61・Hi68~71がある。断面形態では少數ながら方形のものが見られる。

以上、萩博物館に所蔵される鉄鎌を通観した。全てが尖根系長頭式鉄鎌であり、広根系の鉄鎌は存在しない。鎌身部には箭式と端刃箭式の2種が存在し、前者が主体となっている。頭部は鋸化による割れ、膨らみが激しく、中空となっているものが多いが、断面形態は方形を基本とする。頭部に関しては、形態を把握できるものでは7cm内外のものが主体であるようだが(Hi1・Hi3・Hi4・Hi21)、4cm程度の

短頸のものも存在している(Hi7)。

萩博物館所蔵品に関しては、調査期間の制限もあり簡略な接合検討しか行っておらず、確実に接合するもののみ仮接合の状態で火薬・写真撮影を実施した。鉄鎌の個体数に関しては、鎌身部が15点、関部を有する資料が22点、茎部下端もしくは茎部下端付近の破片に関しては個体認定が困難であるがやはり22点程度が存在するようである。

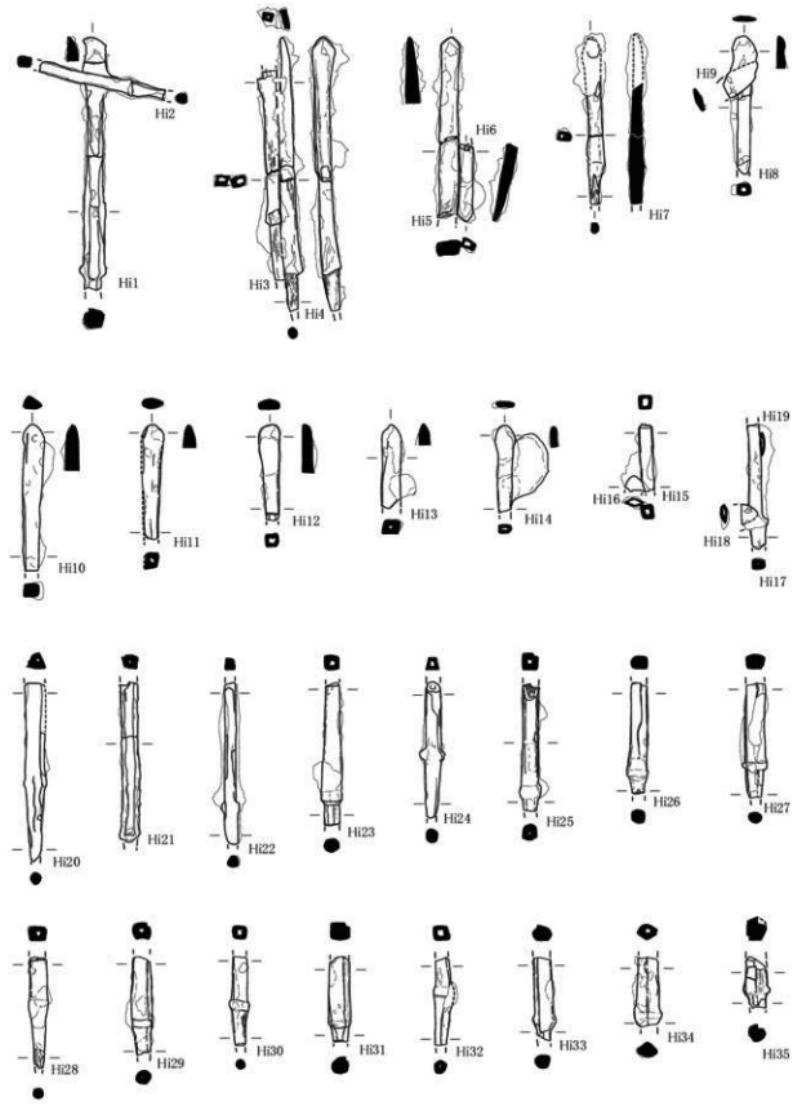
Hi72～77は鉄刀である。Hi72は全面が剥離し原面が遺存していない。遺存状況から見ると平棟平造り直刀の切先部とも思われるが、刀子片の可能性も残す。Hi73も同様に全面が剥離し原面を残さない。身厚から直刀刀身部片と見なされる。Hi74も刀身片。背部が彫れ割れているが、平棟平造りの直刀片であろう。身幅から関部付近の破片と思われる。Hi75も造存状態が悪く、全面剥離している。形状から鉄刀茎部かとも思われるが断定できない。Hi76は平棟平造りの直刀切先部片。鍔により全面に土・石が付着しているが、遺存状態は比較的良好である。身幅2.2cm、背幅0.6cmを測る。Hi77は上下を欠失するが、遺存状態は比較的良好である。鉄刀茎部片と思われる。

『見島総合学術調査報告』では鉄刀は「6片ほど存し、1口分である」と報告されている。萩博物館所蔵品がその6片であろうか。ただしHi72に関しては『見島総合学術調査報告』に「刀子1」という記述が見られることから刀子としてカウントされている可能性がある。いずれにせよ、他の資料からも1口分とは断定しがたい状況である。

Hi78は鉄刀の鍔であろうか。半損品であり、残存径約4.8cm、最大厚0.6cmを測る。断面部より鉄板を重ね折られて造られていることが分かる。周縁部付近に0.2～0.4cmの孔が片面より2孔穿たれている。明確な鉄刀の差し込み孔が遺存していないことから、鍔であれば円形ではなく長円形鍔になるのであろう。『見島総合学術調査報告』で「鍔の断片1」とされるのは本資料を指すものと思われる。

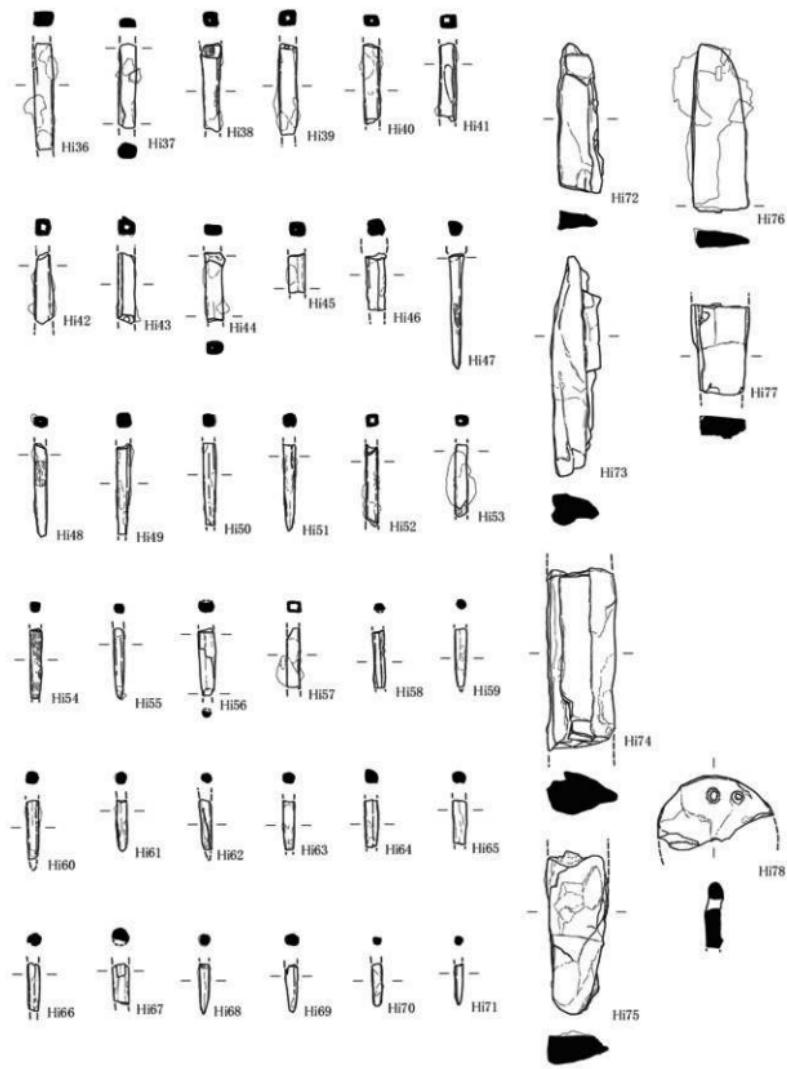
以上が萩博物館に収蔵される第154号墳出土土器・鉄器資料の全貌である。この他、『見島総合学術調査報告』に図・写真が掲載されている須恵器2点(高杯・短頸壺)と、同書に記述がある人骨齒については所在が確認できていない。また同書に写真が掲載されている金環1点、出土の記述がある銅製貯金具2点については調査対象から除外している。これらの資料については、今後とも調査を継続し、他号墳の報告に併せて追加報告を行っていきたい。

今回は短期間での調査であったため、接合検討は最低限のものとし、岡化および写真撮影を優先した。そのため、各種出土資料の個体数に関してはなお検討の余地を残すこととなった。その他、萩博物館所蔵の見島ジーコンボ古墳群出土品はいずれも山口県による文化財指定がなされており、その取り扱いに対する事前の調整が不足していたことを痛感している。将来的な他号墳の調査・報告に際してはこれら諸々の問題に対し十分な準備を行い、より実のある資料公開に結びつけていきたい。



0 5 10cm (1/2)

図7 萩博物館所蔵鐵器実測図①



0 5 10mm (1/2)

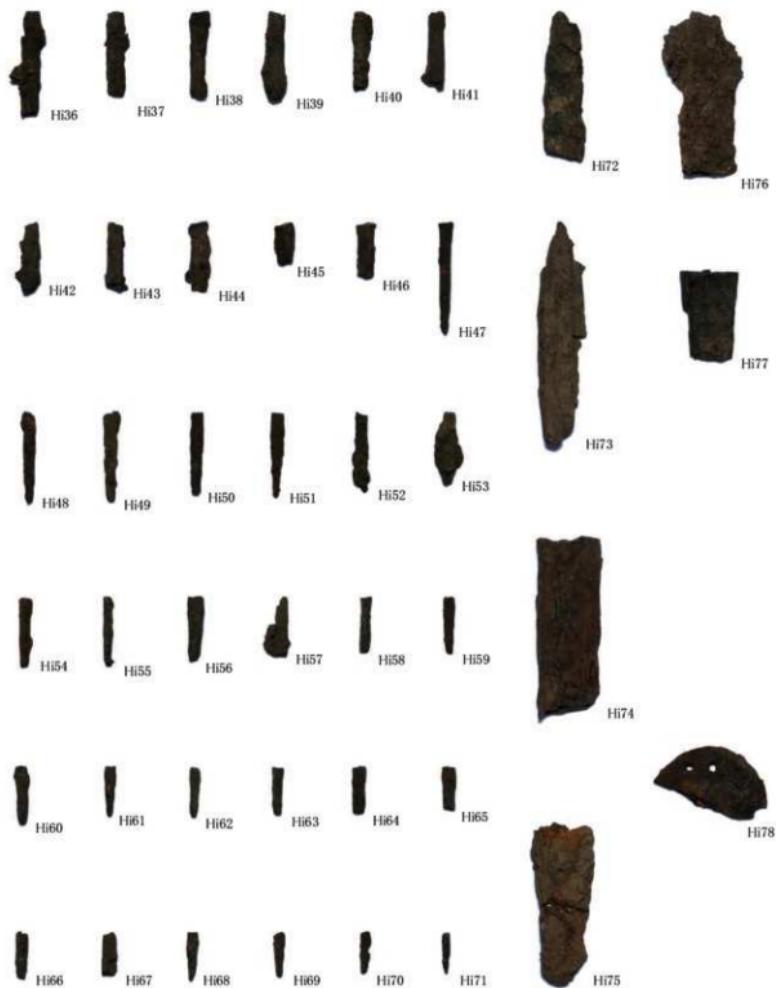
図8 萩博物館所蔵鉄器実測図②



縮尺は 1/2

写真 12 萩博物館所蔵鉄器①

第154号坑の調査



縮尺は1/2

写真13 萩博物館所蔵鐵器②

表2 萩博物館所蔵出土遺物(鉄器)観察表

法量は残存最大値 ④は復元値 ▲は他と合計

遺物 番号	遺構・ 部位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
H1 1	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①101 ②8.5 ③21.04▲	H2に付着。鏃身部は鏃により不明確。 頭部断面方形。
H1 2	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①53.5 ②6.0 ③21.04▲	H3に付着。頭部断面方形 茎部断面円形。
H1 3	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①86 ②8.0 ③22.54▲	H4に付着。頭部断面方形。
H1 4	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①113 ②7.5 ③22.54▲	H5に付着。頭部断面方形 茎部断面円形。
H1 5	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①77 ②9.0 ③14.39▲	H6に付着。頭部断面方形。
H1 6	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①32.5 ②6.5 ③14.39▲	H7に付着。断面方形。
H1 7	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①70 ②7.0 ③7.1	銹化が激しく鏃身部は不明確。頭部断面方形。
H1 8	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①56 ②10 ③5.58▲	H8に付着。銹化が激しい。頭部断面方形。
H1 9	154号墳	鉄鏃	鏃身部	①17 ②10 ③5.58▲	H9に付着。鏃身部中央位で折損。
H1 10	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①60 ②9.0 ③6.99	鏃身間部不明確。頭部断面方形。
H1 11	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①47 ②9.1 ③5.10	丸造りの鏃身を有する。頭部断面方形。
H1 12	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①49 ②9.6 ③3.02	片丸造りの鏃身を有する。頭部断面方形。
H1 13	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①34.5 ②8.1 ③3.33	全体に鏃が覆う。鏃身間部不明確。 頭部断面方形。
H1 14	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①35 ②8.2 ③5.48	銹が激しく土焼が付着しているため鏃身部の形状 が不明確。頭部断面方形。
H1 15	154号墳	鉄鏃	頭部	①27 ②5.9 ③2.71▲	H16に付着。頭部断面方形。
H1 16	154号墳	鉄鏃	鏃身部	①14 ②7.0 ③2.71▲	H17に付着。切先は鏃により不明確。
H1 17	154号墳	鉄鏃	頭部	①51 ②6.5 ③5.98▲	H18+H19に付着。頭部断面方形。
H1 18	154号墳	鉄鏃	鏃身部	①(7) ②(10) ③5.98▲	H17+H19に付着。鏃身部切先片。
H1 19	154号墳	鉄鏃	鏃身部	①不明 ②9.5 ③5.98▲	H17+H18に付着。鏃身部切先片。
H2 20	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①73 ②8.2 ③6.63	頭部断面方形 茎部断面円形。
H2 21	154号墳	鉄鏃	頭部	①66 ②6.0 ③6.3	頭部断面方形。開部下で折損。
H2 22	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①66 ②7.5 ③6.63	頭部断面方形 茎部断面円形。
H2 23	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①59 ②7.8 ③6.59	頭部断面方形 茎部断面不整円形。
H2 24	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①55.5 ②10.5 ③5.88	頭部断面方形 茎部断面円形。
H2 25	154号墳	鉄鏃	体部-茎部	①52 ②7.4 ③5.54	頭部断面方形 茎部断面不整円形。
H2 26	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①46 ②7.7 ③5.72	頭部断面方形 茎部断面不整円形。
H2 27	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①47 ②7.6 ③6.40	頭部断面方形 茎部断面不整円形。
H2 28	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①45.5 ②7.4 ③4.23	茎部表面に木質が確認できる。 頭部断面方形 茎部断面円形。
H2 29	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①40 ②7.8 ③5.18	頭部断面方形 茎部断面不整円形。
H2 30	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①36.5 ②7.3 ③2.90	茎部表面に木質が確認できる。 体部断面方形 茎部断面円形。
H2 31	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①35 ②8.5 ③5.50	頭部断面方形 茎部断面不整円形。
H2 32	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①35.5 ②5.8 ③3.01	頭部断面方形 茎部断面不整円形。
H2 33	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①34 ②7.6 ③4.31	頭部断面不整方形 茎部断面不整円形。
H2 34	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①28.5 ②9.2 ③3.83	体部断面菱形 茎部断面菱形。
H2 35	154号墳	鉄鏃	体部-茎部	①21 ②9.1 ③2.65	残存状態が非常に悪い。 頭部断面方形か 頭部断面不整円形。
H2 36	154号墳	鉄鏃	頭部	①44 ②7.2 ③5.73	断面方形。
H2 37	154号墳	鉄鏃	頭部	①34.5 ②7.3 ③3.69	断面不整方形。 上部は厚みが薄く、鏃身部に移行か。
H2 38	154号墳	鉄鏃	頭部	①36 ②8.6 ③3.04	断面方形。上部は鏃身部附近か。

遺物 番号	遺構・ 層位	種類	部位	法量				備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	
H6 39	154号墳	鉄轍	頭部	①37	②7.6	③1.73		断面方形。
H6 40	154号墳	鉄轍	頭部	①33	②6.7	③2.49		断面方形、図面下部は中空、上部は中実。
H6 41	154号墳	鉄轍	頭部	①32.5	②6.9	③2.89		断面方形。
H6 42	154号墳	鉄轍	頭部	①30	②6.4	③2.97		断面方形。
H6 43	154号墳	鉄轍	頭部	①29	②6.9	③2.98		断面方形。
H6 44	154号墳	鉄轍	頭部	①29	②8.5	③2.90		断面方形。鐵身部付近の頭部片と思われる。
H6 45	154号墳	鉄轍	頭部	①16	②7.0	③1.94		断面方形。
H6 46	154号墳 床面	鉄轍	基部	①23	②8.5	③2.04		基部上部片。断面不整円形。
H6 47	154号墳	鉄轍	基部	①47	②5.6	③2.36		開口下で折損している。一部木質が残る。 断面方形。下端は丸み方形。
H6 48	154号墳	鉄轍	基部	①38	②5.5	③1.89		基部下端。木質が残る。断面方形。
H6 49	154号墳	鉄轍	基部	①37	②6.1	③2.10		全体的に錆が激しい。断面方形。
H6 50	154号墳	鉄轍	基部	①34	②5.5	③1.95		断面方形。
H6 51	154号墳	鉄轍	基部	①35.5	②5.5	③1.65		下端まで残る。上部断面方形、下部断面円形。
H6 52	154号墳	鉄轍	基部	①34	②5.4	③1.59		断面方形。
H6 53	154号墳	鉄轍	基部	①29.5	②5.8	③2.82		断面方形。
H6 54	154号墳	鉄轍	基部	①28.5	②4.8	③1.10		木質が良好に残る。断面方形。
H6 55	154号墳	鉄轍	基部	①29	②4.6	③0.86		基部下端。断面方形。
H6 56	154号墳	鉄轍	基部	①27.5	②7.0	③1.84		破損により断面不明瞭。
H6 57	154号墳	鉄轍	基部	①25	②5.0	③1.46		断面方形。
H6 58	154号墳	鉄轍	基部	①23.5	②4.6	③0.60		裏面は剥離したものと思われるが表面の錆は古い。断面不明瞭。
H6 59	154号墳	鉄轍	基部	①24	②4.8	③0.84		基部下端。断面不整円形。
H6 60	154号墳	鉄轍	基部	①24.5	②5.4	③1.30		基部下端付近。断面不整円形。
H6 61	154号墳	鉄轍	基部	①21	②4.9	③0.69		基部下端。断面不整円形。
H6 62	154号墳	鉄轍	基部	①20.5	②4.7	③0.64		基部下端で端部が僅かに欠損。断面ほぼ円形。
H6 63	154号墳	鉄轍	基部	①20	②4.8	③0.83		断面不整円形。
H6 64	154号墳	鉄轍	基部	①19.5	②5.6	③1.27		断面方形、中実。未処理。
H6 65	154号墳	鉄轍	基部	①18	②5.9	③1.02		断面ほぼ円形。
H6 66	154号墳	鉄轍	基部	①20	②5.4	③0.92		断面不整円形。
H6 67	154号墳	鉄轍	基部	①16.5	②6.7	③1.20		基部上部片。剥離が大きいが、断面ほぼ円形にならざると思われる。
H6 68	154号墳	鉄轍	基部	①20.5	②4.2	③0.75		基部下端。断面円形。
H6 69	154号墳	鉄轍	基部	①19.5	②4.8	③0.59		基部下端。断面不整円形。
H6 70	154号墳	鉄轍	基部	①17	②4.0	③0.52		基部下端。断面方形、中実。未処理。
H6 71	154号墳	鉄轍	基部	①11.5	②3.3	③0.30		基部下端。端部は鋭く尖る。断面ほぼ円形。
H6 72	154号墳	鉄刀	刃身體	①61.5	②18.5	③7.4	④14.37	切先付近の破片か。 全表面が剥離し原面は残っていない。
H6 73	154号墳	鉄刀	刃身體	①89	②20.0	③14.0	④37.68	刃身體が剥離して残っていない。未処理。
H6 74	154号墳 床面	鉄刀	刃身體	①75	②28	③4.479		種類が判らぬ破壊している。 保存状況は比較的良好。
H6 75	154号墳	鉄刀	基部か	①67	②25	③33.78		2件に折損しているものを接合してある。 保存状況は比較的良好。
H6 76	154号墳	鉄刀	刀身切先部	①68	②22.0	③9.5	④30.28	錆、土石の付着はあるが、鉄の遺存状態は比較的良好。
H6 77	154号墳 床面	鉄刀	基部か	①37	②24	③18.35		基部部分か。保存状態は比較的良好。
H6 78	154号墳 床面	鐔か	体部	④53.5	④4.8	④6.0	④11.60	板状の鉄を2枚折重ねている。 片面か2枚が釘孔されている。

## 【山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品】(図9、写真14~16、表3)

Yi1~37は鉄鎌である。いずれも萩博物館所蔵品と同様にいずれも尖根系長頭式に分類される。

Yi1~20は鎌身部が遺存する資料である。Yi1~5は5個体が鎌により付着した資料である。Yi1・Yi2は鎌身-頭部片。鎌身部は主頭鑿箭式か。Yi3は鎌身関部下の頭部で折損している。鎌身部は鎌に覆われており観察困難であるが、主頭鑿箭式もしくは片刃箭(端刃箭)式であろうか。Yi4は頭部片。上下とも欠失している。Yi5は主頭鑿箭式の鎌身部片。鎌身関部下を欠失している。Yi6・Yi7も鎌により付着した資料である。Yi6は鎌身-頭部片。鎌身刀部は鎌で覆われているが、主頭鑿箭式と思われる。Yi7は鎌身部と茎部を欠失しているが、頭部の完存品である。頭部長6.5cmを測る。Yi8・Yi9も鎌により付着している。Yi8は鎌身-茎部片。鎌身端と茎部端を欠失している。鎌身部に明確な闇が観察できないことから端刃箭式と思われる。Yi9は鎌身-頭部片。鎌身部は片丸造りの主頭鑿箭式と見られる。鎌身端部に別個体の鎌片が付着している。Yi10は鎌身-頭部片。鎌身部は主頭鑿箭式。頭部長は6.8cmを測る。Yi11も鎌身-頭部片。茎部を欠失する。鎌身部は主頭鑿箭式で、頭部は闇まで遺存するが、下半は鎌彫れで破損している。頭部長6.5cm。Yi12も鎌身-頭部片。主頭鑿箭式の鎌身部を有する。Yi13は鎌身-茎部片。茎部上位で折損している。鎌身部は主頭鑿箭式で、頭部長6.2cm。Yi14は鎌身-頭部片。鎌身部は片丸造りの主頭鑿箭式である。Yi15・Yi16は2個体が鎌により付着している資料である。Yi15は頭部片。Yi16は鎌身-頭部片。片丸造りの主頭鑿箭式鎌身部を有する。Yi17も鎌身-頭部片。鎌身部は関部をほぼ造り出しており、片丸造りの鑿箭式である。Yi18も同じく片丸造りの鑿箭式鎌身部であるが、こちらは微弱ながら関部を形成している。Yi19は片丸造りの主頭鑿箭式鎌身部片。Yi20は半身が欠失した鎌身部片と思われる。

Yi21~31は頭部片。Yi21とYi22は鎌により付着した資料であり、両者とも鎌身関部付近で折損している。Yi23は他の頭部に比してやや細身である。上端折損部が割れ広がっており、鎌身関部付近かと推定し頭部片とした。茎部または鉄釘の可能性も残る。Yi24~Yi27は頭部-茎部片。頭部上端断面から見ると、両者とも鎌身関部直下付近で折損したものと思われる。茎部残存長はYi24が6.5cm、Yi25が5.4cm、Yi26が5.7cm、Yi27も5.7cm。Yi28も頭部-茎部片。頭部下位から関部、茎部上位が遺存する。Yi29は頭部片。下端破損部は関部付近であろうか。Yi30も頭部片。断面は膨らみを持つ長方形であり、鎌身部付近の破片か。Yi31は頭部-茎部片である。鋸割れが激しいが、方形の頭部に長辺円形の茎部を有す。

Yi32~38は茎部片である。断面形態は円形のもの(Yi33・Yi34・Yi38)と方形のもの(Yi32・Yi36・Yi37)とが存在する。

Yi39は刀子の茎片か。片面側面で大きく削れているが、元来は断面隅丸二等片三角形状の資料であったと思われる。

Yi40は半造り鉄刀の関-茎部片であろう。剥離が激しく、原面は茎部の片側面にしか遺存していない。刀身部現存最大身幅3.5cm、茎部身幅2.4cm。

## 3. 玉類(図9、写真16)

『見島総合学術調査報告』に報告されているように、管玉1点・ガラス小玉2点が山口大学埋蔵文化財資料館に所蔵されている(資料記号Yb)。

Yb1は碧玉製管玉。全長9.4mm、直径4.0mm、孔径1.9mmを測る。重量は0.25g。Yb2・Yb3はガラス小玉。両者ともやや青みの強い水色ガラス製である。Yb2は全長4.4mm、直径4.0~4.8mm、孔径1.0mm、重量0.13gである。Yb3は全長3.8mm、直径4.3~5.0mm、孔径1.2~2.0mm、重量0.1g。

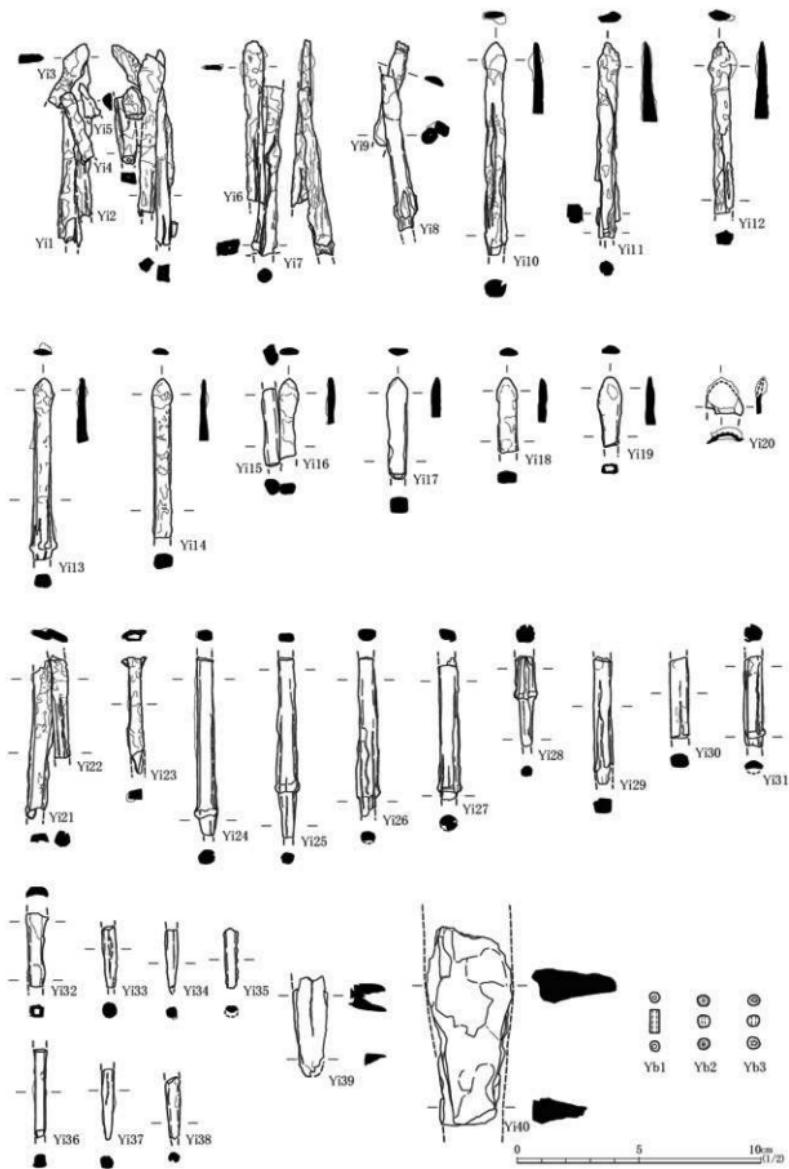
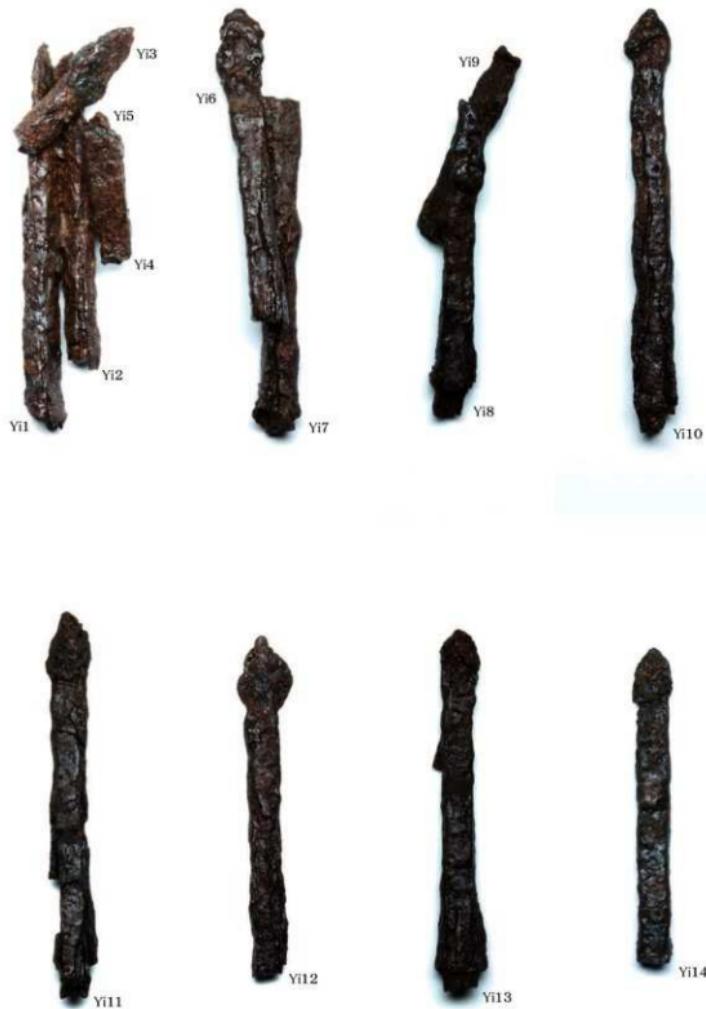


図9 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器・玉類実測図



縮尺は実寸

写真14 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器①



縮尺ほぼ実寸

写真 15 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器②



縮尺はほぼ実寸



写真 16 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器③・玉類



樺代洋平実寸

写真 17 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器X線写真 ①



写真 18 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鉄器X線写真 ②



写真 19 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵鐵器X線写真 ③

表3 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵出土遺物(鉄器)観察表

法量は残存最大値 ○は復元値 ▲は他と合計

遺物 番号	遺構・ 部位	種類	部位	法量				備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	
YI 1	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①80 ②9.0 ③22.61▲				YII-5で付着。頭部断面方形。
YI 2	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①66.5 ②11.5 ③22.65▲				YII-5で付着。頭部断面方形。
YI 3	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①28.2 ②10.5 ③22.66▲				YII-5で付着。鏃身部は鏽により不明瞭。 頭部断面方形。
YI 4	154号墳	鉄鏃	頭部	①31 ②8.5 ③22.67▲				YII-5で付着。頭部断面方形。
YI 5	154号墳	鉄鏃	鏃身部	①10.5 ②9.0 ③22.68▲				YII-5で付着。
YI 6	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①68.5 ②9.5 ③15.58▲				YII-5で付着。頭部断面方形。
YI 7	154号墳	鉄鏃	頭部	①69.5 ②10 ③15.58▲				YII-5で付着。頭部断面方形。
YI 8	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①65.5 ②10 ③19.29▲				YII-5で付着。鏃身開部不明確。頭部断面方形。
YI 9	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①43.5 ②7.5 ③9.29▲				YII-5で付着。片丸造りの鏃身を有する。 頭部に別個体の鉄片付着。
YI 10	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①87.5 ②10 ③11.54				頭部断面方形か。
YI 11	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①79 ②11 ③8.89				頭部下半部は鏽により破損。頭部断面方形。
YI 12	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①70 ②12 ③5.97				頭部断面方形。
YI 13	154号墳	鉄鏃	鏃身部-茎部	①71.5 ②8 ③7.78				茎部上位で折損。頭部断面方形。
YI 14	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①65 ②8.5 ③6.33				片丸造りの鏃身を有する。頭部断面方形。
YI 15	154号墳	鉄鏃	頭部	①32 ②6.5 ③5.00▲				YII-5に付着。片丸造りの鏃身を有する。 頭部断面方形か。
YI 16	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①34 ②8 ③5.00▲				YII-5に付着。片丸造りの鏃身を有する。 頭部断面方形。
YI 17	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①41.5 ②8 ③4.87				頭部がほぼ無い片丸造りの鏃身を有する。
YI 18	154号墳	鉄鏃	鏃身部-頭部	①31 ②7 ③4.21				片丸造りの鏃身を有する。頭部断面方形。
YI 19	154号墳	鉄鏃	鏃身部	①29 ②10 ③1.61				鏃身部片。片丸造り。頭部に続く断面は方形。
YI 20	154号墳	鉄鏃	鏃身部	①16 ②15 ③1.50				鏃身先端部。半身が欠損。
YI 21	154号墳	鉄鏃	頭部	①66 ②6.0 ③8.3				頭部付近で折損。頭により下半部半身欠損。 頭部断面方形か。
YI 22	154号墳	鉄鏃	頭部	①66 ②7.5 ③8.63				頭部付近で折損。頭部断面方形か。
YI 23	154号墳	鉄鏃?	頭部?	①47.5 ②5.5 ③2.30				上端部に折損しているが広がる。 茎部、または鉄針の可能性有り。
YI 24	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①73.5 ②6 ③8.23				頭部断面方形 茎部断面円形。
YI 25	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①74 ②6 ③7.62				頭部断面方形 茎部断面円形。
YI 26	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①65 ②6 ③6.4				頭部断面方形 茎部断面円形。
YI 27	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①58.5 ②6.5 ③7.4				頭部断面方形 茎部断面円形。
YI 28	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①36.5 ②5 ③4.35				頭部断面不整円形 茎部断面円形。
YI 29	154号墳	鉄鏃	頭部	①51 ②7 ③5.20				頭部断面方形。下端は関節か。
YI 30	154号墳	鉄鏃	頭部	①33 ②7 ③3.22				頭部断面丸みを持つ方形。
YI 31	154号墳	鉄鏃	頭部-茎部	①37.5 ②7 ③4.41				鏽により破損が多い。 頭部断面方形 茎部断面椭円形か。
YI 32	154号墳	鉄鏃	茎部	①30 ②9 ③2.00				下部断面方形 上部断面椭円形か。
YI 33	154号墳	鉄鏃	茎部	①26 ②5.5 ③1.49				茎部断面円形。
YI 34	154号墳	鉄鏃	茎部	①24 ②5 ③1.17				茎部断面円形。
YI 35	154号墳	鉄鏃?	茎部?	①24.5 ②5.5 ③0.52				残存状態が非常に悪い。 断面不整円形か。
YI 36	154号墳	鉄鏃	茎部	①36.5 ②3.5 ③1.87				茎部断面方形。
YI 37	154号墳	鉄鏃	茎部	①29 ②5 ③1.27				茎部下端部。断面方形。
YI 38	154号墳	鉄鏃	茎部	①25.5 ②6 ③1.52				茎部断面円形。

## 第154号墳の調査

遺物 番号	遺構・ 層位	種類	部位	測量			備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	
YI-39	154号墳	刀子	基部	①41	②15	③8.56	鉄により断面三角形の頂点が膨張破断しているものと思われる。
YI-40	154号墳	鉄刀	基部	①82	②36	③16	④62.9 鋒端がしく遺存状態が悪い。開部一基部付近か、下部断面附近のみ原面遺存。

## 【註】

- 文献8の388頁記載によるが、同書126頁に掲載されている同年調査された第123号の報告部分には「昭和36年の9月4、5、6の3日間発掘調査を実施した」とある。
- 文献8の「第39図 見島古墳群の分布図Ⅱ」を見ると、第147号墳の南に近接して右室式の書き込みが見られる。これが主体部であれば12基ということになる。
- 昭和36年(1961)に調査された第123号墳、昭和57年(1982)に調査された第16号墳の奥壁には2例の石材が縦長に左右に並置されている(文献12)。
- 須恵器把手(II)については、注記カードには「154号床面」とあったが、『見島総合学術調査報告』には「擾乱層上」との記述があるため調査担当者の報告である『見島総合学術調査報告』に従い擾乱層上品として取り扱っている。
- 今回の調査では、『見島総合学術調査報告』で床面出土として記述があり、「第27図 須恵器実測図」にも掲載されている須恵器高杯1点(第27図の13)、須恵器短頸蓋1点(第27図の12)が確認できなかった。今後も追跡調査を継続する所存である。
- 文献3には各右室の実測図が掲載されており、遺物出土地点に付された番号の種別が何であるかをキャプションで提示してくれているものもあるが、提示がないものも多い。第154号墳の場合は後者である。
- 7) 鉄鏃の分類名称・部分名称については文献4を参考としたが、軸身部分類は文献10aを参考とした。

## 第1節 考察の前提

見島ジーコンボ古墳群の出土遺物を考察するにあたり、常に考慮に入れなくてはならないのは①追葬の可能性②破壊・盗掘による資料散逸の可能性③調査精度、資料の誤操作の可能性である。

①については、見島ジーコンボ古墳群の埋葬施設が横穴式石室の影響下に造営されていることは明確であり、第154号墳を含め西地区に分布する箱式石棺状の石室も、遺存状況の良いものは玄門部に閉塞石と見られる礫石が設けられている(第124・128号墳)ことから、やはり横位からの埋葬、すなわち追葬を意識した構造と見なして良い。つまり見島ジーコンボ古墳群は、当初より单体埋葬ではなく複数の遺体を埋葬することを前提に各墳墓が造営され、各石室には複数時期の遺物が残されるのが常態ということになる。

②は、元来石室内から発見されるべき遺物が調査時および現在残されていないという可能性である。この可能性を持って、見島ジーコンボ古墳群では現存する無機物資料をして埋葬当時の状況を復元することを困難なものとしている。

③については、昭和35年(1960)から昭和37年(1962)にかけて山口県教育委員会・萩市教育委員会により実施された学術合同調査を対象とした可能性である。合同調査では、限られた日程でより多くの墳墓を確認すべく、現在の視点からするとかなり過密なスケジュールで発掘調査が進められている。第2年度は8月29日から9月6日の9時間に10基の埋葬施設が、第3年度は8月29日から9月4日までの7時間で8基(番外を含めると10基)の埋葬施設に調査の手が加えられている。『見島総合学術調査報告』や収蔵された遺物の注記カードを見ると、1基の埋葬施設に対しておおよそ1~3時間で調査が実施されており、かつ同一日に複数基が調査されている。当時の調査精度を否定、批判する気持ちは毛頭ないが、このような過密スケジュールで各墳墓に残された小片資料(鉄器片や玉類など)を完全に回収できたかどうかに不安が残る。

また第154号墳を例に挙げると、本墳は『見島総合学術調査報告』に比較的多数の土器実測図・写真が掲載されているのであるが、1個体として接合・復元された土器片の床面、擾乱層・表土出土の別が定かではない。この状況下では床面出土とされる資料は床面出土、擾乱層出土とされる資料は擾乱層出土品として取り扱う以外の方法がなく、いくら推察を加えたところでそれは想像の域を超えない。

さらに述べると、現地調査終了から現在までの間に半世紀に及ぶ期間、出土品に対しどれほどの資料整理の手が加えられたのか、今となっては追跡する術を持たない。實際に今回筆者が調査報告を成すため当館所蔵品に面した際、何時、誰が、どのような方法で整理作業を行った結果が現在の保管状況であるのか、その足取りを正確に追うのは不可能な状況であった。

①は遺跡自体の性格によるものであり、②はある種の自然発生的な事故、天災とも考えられる。しかし③は明確なる人災であり、調査に協力し収蔵の一端を担った本学の責は多大と言わざるを得ない。以上のことを明記し、本書における遺跡の考察が限定的なものとならざるを得ないことを謝すとともに、今後の見島ジーコンボ古墳群の再整理調査において、これら諸問題に対しより効果的な調査方法を模索して行く所存である。

## 第2節 土器による考察

前述のごとく、第154号墳出土土器は「床面」と「攪乱層・表土」出土に大別される。組成を見ると床面は須恵器壺蓋・身、長頸壺、高杯、短頸壺、土師器壺そして黒色土器片で構成され、攪乱層・表土は須恵器壺蓋・身、長頸壺、甕・壺類である。壺身に関しては、識別でき 資料はいずれも高台を有するタイプである。以上の資料を考察する上で、見島ジーコンボ古墳群において出土遺物が網羅的に公開されている昭和57年(1982)の調査成果を参考とする(図10)。

まずは本墳の最終埋葬に伴う資料であろう床面出土品を見てみよう。須恵器壺蓋(H3・4)はいずれも輪状つまみを有するものである。第16号・72号・113号出土品と比すと、つまみ高の低下が見られ、特にH4は天井高も下がり扁平化していることから、3基出土品より時期的にやや降るものであろう。須恵器壺は、全形が復元されるものはH6の1点のみである。体部が直線的に大きく開き立ち上がるタイプのもので、高台は断面三角形状を呈しており、これも昭和57年調査3基の高台付壺より後出の属性である。ただし、口径から見て上記の蓋とのセット関係は成立しない。

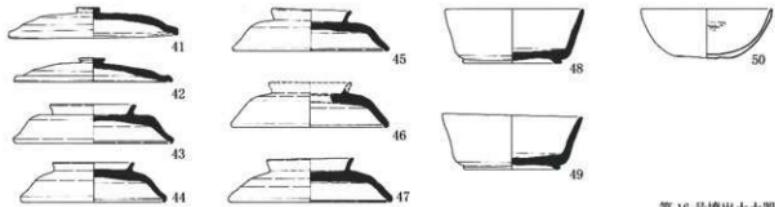
須恵器長頸壺2点(H1・2)は一見して体部の形態差が大きい。山口県内では長登銅山跡大切III C区2T36層以下に床形体部の長頸壺と肩部に稜を有する長頸壺とが出土している。報告者によると、36層以下は8世紀後半に相対することが可能で、前者から後者への形態変遷が推考されているが、県外に目を向けると山雲国府跡日岸田地区62号溝においては輪状つまみを有する須恵器蓋と両形態の体部を有する長頸壺とが出土しており、両者が長期間にわたり共存していたことを伺い知ることが出来る。第154号墳出土資料には、高台端部の処理や頸部沈線の有無等に差異が見られるが、山雲国府跡日岸田地区62号溝、また同一時期と推されている33号土坑から出土している長頸壺のバリエーションから見るに、両者の同時存在を否定するまでは至らないであろう。

須恵器高杯2点(H7・所在不明品)は、極めて特異な形態の資料である。H7は低脚の高杯で、比較的細い脚柱部を有しているが、中位以上は中実となっている。杯部は杯底から鏡く立ち上がる。所在不明高杯に関しても、『見島総合学術調査報告』に掲載された文章や図・写真を参照すると、H7同様小型の高杯であるが、同じく細い脚柱部の中位以上は中実となっており、脚部にはスカシを意識したものと思われる縦方向のヘラ刻みが6条施されているようである。杯部はH7に比すと杯底からやや内湾しつつ外開きに立ち上がり、口縁も低下しているが、しっかりと壺形態を保持している。

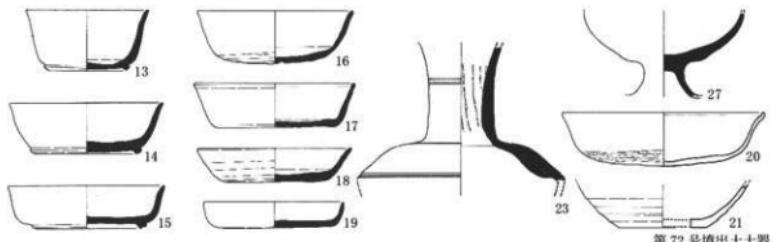
土師器壺4点(HI8~11)は、形態差が大きいがいずれも畿内土師器模倣品であろう。第72号墳出土の土師器壺20に見られた口縁内端巻き込みの沈線は第154号墳には見られないが、H10では内端の肥厚として残っている。

さて、これら床面出土とされる土器群で、問題となるのはやはり2点の高杯であろう。山口県内では壺蓋に輪状つまみが出現する時期でこの種の高杯が伴出する事例は管見に触れない。さらに上位中実の脚柱部は当県では他に存在が確認できず、より広域に目を向けても香川県打越窯灰原出土品などに散見されるに過ぎず、時期的にも問題を生ずる。また所在不明高杯の脚柱部に施されたヘラ刻みは、古墳時代以来の高杯脚部のスカシが形骸化したものと見られることからも、両者は他の土器群より時期的に遡る資料と思われる。床面出土を否定するものではないが、ここではこの高杯2点を第154号墳の初葬期の遺物と見なしたい。初葬時期に関しては、攪乱層出土の口縁にかえりを有する壺蓋の時期、8世紀初頭を中心とする時期に求めておきたい。

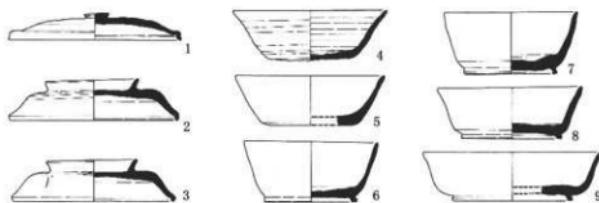
図IV章 第154号墳の方格



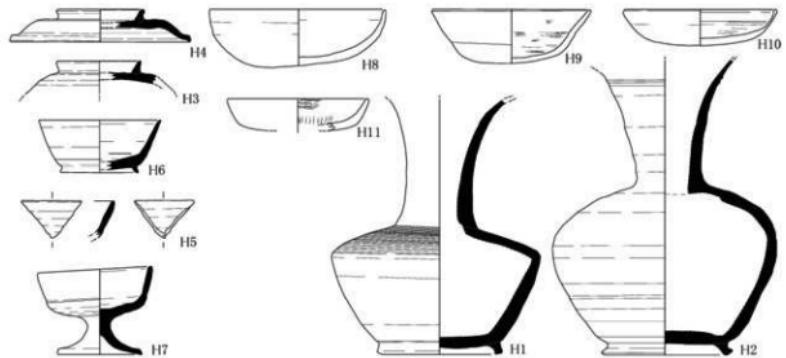
第16号墳出土土器



第72号墳出土土器



第113号墳出土土器



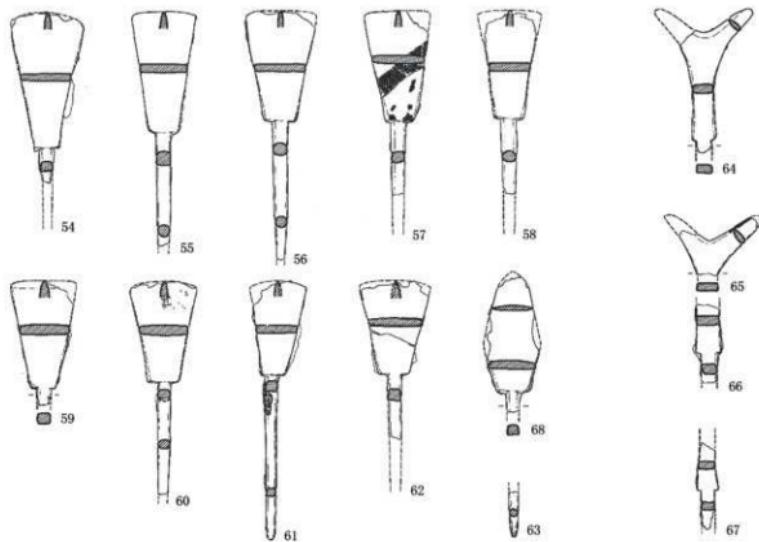
第154号墳出土土器

\*資料番号は文献12と本書による

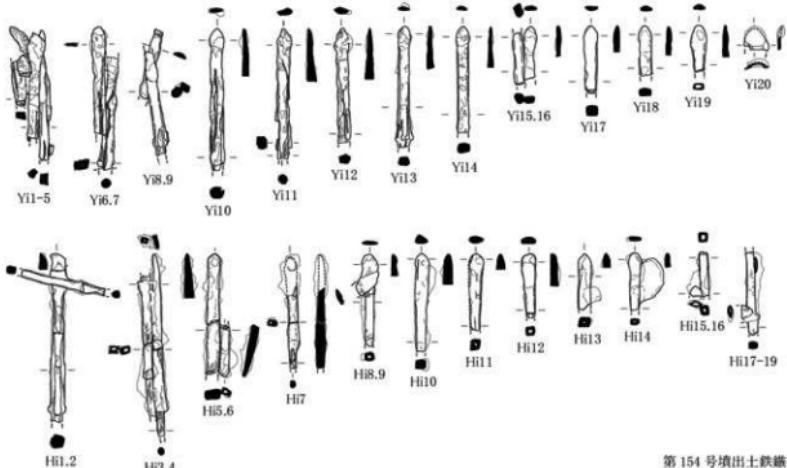
図10 見島ジーコンボ古墳群出土土器

0 10 20cm  
(1/4)

図 IV 単一第154号坑の方法



第 16 号填出土鉄鏃



第 154 号填出土鉄鏃

\*資料番号は文献 12 と本書による



図 11 見島ジーコンボ古墳群出土鉄鏃

それでは、その他の床面出土資料、即ち最終埋葬時期を考察したい。第16・72・113号墳の調査を実施した乗安和二三氏によると、3基の間には大きな時期差はなく、須恵器は同一型式内での時間差程度と見なされており、須恵器と伴出した石鏡の年代観から810年以降で800年代半ばまで降らない時期、すなわち9世紀前葉にその年代が推察されている。<sup>34</sup> 調査後約30年が経過したが、筆者はこの年代観にさほど変更の必要はないと考える。第154号墳の最終埋葬に関しては、前述した如く輪状つまみを有する坪蓋の形態、坪身の高台形状、土師器坪の形態から3基よりやや遅れる時期、すなわち9世紀の第2四半世紀を中心にその時期を考えておきたい。この時期は、当県では桑原邦彦・池山洋文両氏が生産地から提示され、後代池田氏により再整理されたVIA期に該当する。概ね妥当な年代観であろう。

しかしながら、見島ジーコンボ古墳群に埋存する土器類に対し、山口県の編年觀をもって時期比定を行なう方法にも問題が内在している。確かに見島は現在山口県萩市に所属しており、『和名類聚抄』の大東急記念文庫本、元和古活字本には三隅、深川、日置などに並び三嶋(島)の文字が長門国大津郡に見られることから、10世紀前半期には大津郡の一郷であったと考えられる。しかしそれ以前の文献に見島が登場することはなく、律令施行以来一貫して長門国の1地域であったのか、はたまた山陰道、西海道に管轄された地域であったのかすら不明である。

過去に行なわれた見島ジーコンボ古墳群出土須恵器の胎土分析によると、「山口県および九州の須恵器とは合致せず、強いて分析値の最も近いものを求めるに、東山陰地方の発で焼かれたものに似る」という所見があるとされる。<sup>35</sup> その一方で、近年見島小学校背後の山腹一帯(堅田遺跡近辺)から焼き損じて融着した須恵器が採取されているようである。他地域からの搬入、自地域での生産を含め、今後の検討課題と言えよう。

### 第3節 鉄器による考察

出土鉄器の内、鐵鏃を考察の対象とする。

『見島総合学術調査報告』では、各石室からの鐵鏃の出土、特に西地区に分布する石室からは多量の出土が示唆されているものの、図示されたものは1点もなく、写真図版に第56号墳出土の2点が示されているに過ぎない。そのためここでも昭和57年(1982)の調査成果を参考とする(図11)。

第16号墳出土鉄鏃と第154号墳出土鉄鏃には明確な相異がある。第16号墳は全て平根系の有茎平根式鉄鏃で構成され、鏃身體形は鑄矢である雁又鏃が最少でも3点(64~67)、その他方頭斧箭式9点(54~62)、柳葉式と五角形式の折衷様式とも言えるものが1点(68)である。一方、第154号墳は、鏃身體部形態に多少のバリエーションを有するものの全て尖根系長頭式鉄鏃であり、平根系は存在しない。個体数に関しては、断定しかねるものも含め31、関節から33点が計測可能である。

奈良時代の矢については、正倉院中倉に伝わる矢では胡縁に付属する鉄鏃では長頭式の鑄箭式が約90%を占め、胡縁に伴わないものでは長頭式の鑄箭式・片刃箭式、端刃箭式でやはり全体の約90%を占めているそうであり、遺跡出土品を見ても古代を通じての長頭式主体は首肯されるようである。第154号墳はまさにその状況を示すものと言えよう。かたや第16号墳は、古墳時代以来瀬戸内沿岸および九州北域に特徴的に分布する方頭式が主体を占めており、第154号墳との性格の違いを明確に示している。両者には被葬者の埋葬時期に多少の差が推定されるものの、時期差内の武器組成の変化に原因は求められまい。やはりこの組成差は被葬者の身分、つまり鈎矢・上蓋矢を有する者(第16号被葬者)と征矢

しか有さざる者(第154号墳)との差を示すものと考えたい。第16号墳出土の石鉤もまたその根柢の一端となるのではなかろうか。

#### 第4節 見島ジーコンボ古墳群及び第154号墳の特性

見島ジーコンボ古墳群は、過去実施された調査において「対外関係の前進基地としての集団の移住」「官人たちを頂点とする重構造の集団」「軍事機能を備えた集団が駐留」「軍事機能を荷って居住した集団の任半で他界した人々の奥津城」等様々な見解が提示された<sup>210</sup>。いずれも現在では定説として見なされているが、本書を結ぶにあたりもう一度問題点を整理したい。

##### 1. 墓群の造営・埋葬時期問題

『見島総合学術調査報告』では「7世紀後半から10世紀にわたってある特殊な集団の移住」が想定されている。約200基と想定される墳墓の約1割にしか調査の手が加えられておらず、さらに悉皆的な資料の公開が行われたのは4基に過ぎない現状ではあるが、『見島総合学術調査報告』に掲載された遺物図、そして昭和57年(1982)の山口県教育委員会による調査、そして今回の資料再調査により、7世紀後半からの造営開始は完全否定し得ないものの、埋葬時期の中心が9世紀代、しかもその前半期にある可能性がさらに高まつたと言える。ただし、前述したように横穴(口)系石室で閉塞施設を有する以上、発掘調査において良好な状態で発見されるのは「最終埋葬状況」である可能性が高い。この理由から、現状では各墳墓の築造時期・順序を推察するのは困難である。

##### 2. 石室構造と出土品に見られる階層差

昭和57年に第16・72・113号墳を調査した乗安氏は、石室規模の大小と副葬品の質的内容に相関関係を見出し、一集団内での被葬者の階層差をその背景と推察している。上記3墳はいずれも横穴式石室状の主体部が構築されていたが、第154号墳はさらに構築が簡便な箱式石棺状の主体部を有しており、前述したように第16号墳と第154号墳の間には出土遺物に大きな差が見られる。前者から浮かび上るのは集団内で指導的立場にある「武官」像であり、後者から浮かび上るのはそれに準いられる「兵士」像と言えよう。

最後に、見島ジーコンボ古墳群を継続調査する上で、当時の律令軍制を確認しておこう。

『養老令』 軍防令 備戎具條<sup>211</sup>

凡兵士、每火締布幕一、着裏、銅盆小釜、隨て二口、鐵一具、剣椎一具、斧一具、小斧一具、鑿一具、鎌一具、毬一具、火繩一具、熟艾一斤、手鉗一具、每人弓一張、弓弦袋一口、副弦二條、征箭五十隻、胡錐一具、太刀一口、刀子一枚、礪石一枚、蘭帽一枚、飯袋一口、水桶一口、鹽舟一口、輕市一具、鞋一兩、皆合自衛。不可闕少。行軍之日、自衛將去。若上番年、唯將人別戎具。自外不置。

この条文を整理すると以下のようである。

1. 「火(兵士10人)」(率軍防令 兵士爲火締「凡兵士、十人爲一火。」)ごとに備えるべきもの
  - 締布幕: 1口 (兵士10人が休むための布幕)
  - 銅盆・小釜: どちらか2口 (煮炊き・煮沸に使用する銅鍋か鉄鍋)
  - 鐵: 1具
  - 剣椎: 1具 (革製用具のかなばさみ、または鉄を打つ鉄槌)
  - 斧: 1具
  - 小斧: 1具
  - 鑿: 1具
  - 鎌: 2張
  - 鎧: 1具 (鎧冶用具のかなばさみ)

## 2. 兵士50人ごとに備えるべきもの

○火鑓:1具(発火具(ひきり・ひうち)) ○熟艾:1斤(点火用の乾燥させたヨモギ) ○手銃:1具

## 3. 兵士が各自で供えるべきもの

○弓:1張 ○弓弦袋:1口(つのつるを入れる袋) ○副弦:2条(弓箭のわづる) ○征矢:50隻

○胡鎌:1具(矢筒) ○太刀:1口 ○刀子:1口 ○礪石:1枚(砥石) ○齒帽:1枚(草の禰み笠)

○飯袋:1口 ○水桶:1口(水筒) ○塙桶:1口 ○脛巾:1具(はばき・脛用の脚絆)

○鞋:1両(かわらぐつ・草鞋)

## 4. 行軍のときは本条に規定した軍器軍用品を全て持たせるが、衛士・防人が上番する際は、兵士各々が備えるべきものを持って行け。

4の内容から、当時の律令国家が班田農民に3に含まれる武器の自弁を要求した、換言するとこれらの武器の私有を認めていたことが分かる。逆に、軍防令には以下の条文も存在する。

## 『養老令』 軍防令 私家鐵鍊條

凡私家、不得有鉢、鉢、斧、傘、傘、盾、具裝、大盾、小盾及軍幡。唯樂鼓不在禁限。

この条文では、皮の披、金の披、斧、二丈の矛、一丈二尺の矛、馬甲、角笛、管笛、軍旗類の個人所有を認めていない。

これら軍防令の解釈には所説有るようだが、見島ジーコンボ古墳群出土遺物を精査することにより、当時の兵士の使用物の実質的な私有・公有の別を復元することも可能ではないかと考える。遺跡の解釈をさらに深化させるよう、今後の調査に努めたい。

## 【注】

1) 文献3

2) 文献14

3) 出雲国府跡日岸田地(5号井戸の上部埋土から同様のヘラ刻みによるスカシを有する高杯脚柱部が出土している。報告では該当資料の山上層を古代末の堆積と見なしているが、これは井戸下層埋土山の遺物から導いた年代観であり、高杯自体の年代を示すものではないと思われる(文献14)。

4) 文献12

5) 文献11

6) 文献11

7) 文献10a・b

8) 征矢としての方頭斧箭式の存在も指摘されている(文献10a)

9) 文献8・12

10) 文献1

## 【文献】

- 1) 舟田龍治(1964)『註解・養老令』, 信文堂, 東京
- 2) 渡田善文(2004)「集成図 須恵器」, 山口県(編)『山口県史 資料編考古2』, 山口
- 3) 渡田善文・小池伸彦・森田零一・八木充(1993)『長竿銅山跡Ⅱ』, 美祢町文化財調査報告第5集, 美東(山口)
- 4) 尾上元規(1993)「古墳時代鉄織の地域性－長頸式鉢出出現以降の西日本を中心として－」, 考古学研究会(編)『考古学研究』第40巻第1号, 岡山
- 5) 河野道(1959)「第三部 人文 第十六編 文化財、史蹟、名勝」, 萩市誌編纂委員会(編)『萩市誌』, 萩(山口)
- 6) 国守進「中世の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)
- 7) 桑原邦彦・池田善文(1981)「防長地域の須恵器遺跡と編年研究」, 岬陽考古学研究所(編)『山口県の十師器・須恵器－集成と編年－』, 光(山口)
- 8) 斎藤忠・小野忠源(1964)「考古の部」, 山口県教育委員会(編)『見島総合学術調査報告』, 山口
- 9) 依教雄(1959)「第二部 沿革 第四編 古代」, 萩市誌編纂委員会(編)『萩市誌』, 萩(山口)
- 10) a: 津野仁(1990)「古代・中世の鉄織」, 物質文化研究会(編)『物質文化』54, 東京  
b: 津野仁(2002)「古代鉄織からみた武器所有と武器政策」, 國學院大學柳木短期大学史学会(編)『柳木史学』16巻, 柳木5)
- 11) 中村哲也・国守進(1989)「原紹・古代の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)
- 12) 乗安和二(1983)「見島ジーコンボ古墳群」, 山口県教育委員会(編), 山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口
- 13) 北田直・弘津史文・小川五郎・三宅宗悦・柿川従義(1927)「阿武郡見島文化の研究」, 山高郷上史研究会(編)『山高郷上史研究会考古学研究報告書－台賀紀年号－』, 山口
- 14) 間野大系・林健亮・淡波政巳(2006)『史蹟山芸田府跡4』, 風上記の丘地内遺跡発掘調査報告書17, 松江(島根)
- 15) 三輪岩之助(1923)「長門見島の遺跡」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第14巻第3号, 東京
- 16) 山本博(1935)「長門國「島村の弥生式遺跡と古墳出土遺物－特に鈎帯について－」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第25巻第8号, 東京

館藏資料調査研究報告書1  
**見島ジーョンボ古墳群**  
第154号墳出土資料調査報告

平成23年3月31日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8